
未来からの転生者 オリ主は戦闘機人のようです

恋町小路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来からの転生者 オリ主は戦闘機人のようです

【Nコード】

N4911V

【作者名】

恋町小路

【あらすじ】

ネギま！ 正史とは異なる歴史を辿った、絶望的な未来に生きた戦闘機人コミチ。

彼女は大崩壊以前の地上世界の地球に時空間跳躍する。タイムスリップ

コミチは中等部の一般生徒であった小路となって再び麻帆良学園に通うことになる。

そう、世界を変える要素を持った人間たちが集まる学園に。

現在、バカ女（恋町）に千雨たん振り回され中。

そして夕映と友達になろうとのどかが恋町に接触するのだった。

そこから始まる新たなネギま！ ストーリー。
とりあえず流されながら原作開始まで進めます。
生き延びるため、子ども先生を利用させてもらいます（だが小路は
おバカである）。

図書組を中心に人間関係構築中。

武道四天王やら原作関係者にフラグを立てていきます。

百合っばいのもあるよ！（自重）

【0】世界の終末（ある未来の終わり）

終焉に向かう世界・地上

闇夜を切り裂き雷鳴が咆哮を上げる。

稲光が照らし出すは魔界の如き変容した大地。

夜、といったか、否、今は正午を過ぎた時間のはずだった。

空を覆い尽くす淀んだ黒い雲が日中の日差しを遮っているのだ。

決して晴れることのない闇がどこまでも支配する灰色の大地。

雷鳴と共に照らし出されるのは地平線まで続く地獄絵図だ。

破壊されつくし、倒壊した都市の成れの果てがそこにあった。

地下や大地のいたる所ににその白い骨を晒し、折り重なって倒れた人々の物言わぬ死骸の髑髏の山は数千、数万を悠に数える。

文明は死に絶え、大地は毒に侵され、草木一本すら生えることはない。

冷たく大地は凍りつき、吹きすさぶ風に雪が混じっていた。

暗い空はまるで嵐のように暗雲が蠢いていて、まるで空そのものが一匹の巨大な竜であるかのようにだった。

物騒な鉄の迷彩を施された戦車と武装した兵士達の群れだけが生きた存在の証を主張するように進軍する足を止める。

戦場にいた兵士が叫ぶ。

そう、そこは戦場だった。

「来るぞ!!!」

次の瞬間、雲を割って幾重もの魔法陣が天空に現れていた。

魔力の帯をまとったそれは途方もなく大きく、空を覆いつくして

いく。

兵士が指さした先、遙か空高くに異形の白い悪魔が姿を表していた。

それはあまりにも歪に変形した人型の兵器。

狂気を具現化したような、生物と機械を組み合わせたような醜悪な怪物の姿に、兵士達は戸惑いや混乱の声を上げることなく、沈黙を持って兵装を確認し銃のトリガーに指をかけていた。

巨大な異形の化物に対抗すべく設置された戦車群はあまりにも小さく見えた。

やがて火蓋を切ったように戦車から砲撃が開始されると、同時にその白い悪魔の口から無数の翼を持った存在が戦場に向けて降り立っていく。

黒い雨が降り注ぐかのように空を黒い点が埋め尽くしていく。

それはまさしく悪夢の始まりだった

地上の人類の用いる兵器と、天空から現れた悪魔如き存在が振るう魔の力がぶつかり合う。

衝撃音と爆発音、目もくらむようなビーム兵器。

戦車があつという間に鉄くずと化し、溶解したそれが大地を赤く溶かした。

悪魔の胸に巨大な穴が開き頭を吹き飛ばす。

人体がひしゃげ、肉体の一部を、もしくはすべてを吹き飛ばされ、ねじ切られ、首を失い、焼きつくされ、凍り砕かれ、血をすすられて殺されていく。

開戦わずかの間に幾百もの命が無残に散っていく。

人類も魔物側もどちらが優勢ともいえない。

お互いが暴力を振るう度に両陣営の兵力は削られていく。

魔を滅する化学魔導兵器と、魔法の力で人類を叩き潰す悪魔の如き異形の存在達。

ただひたすら、互いの存在を滅するためだけに戦っていた。人類側は無差別に砲撃を打ち出し、周囲を赤い炎に染め上げていく。

敵味方の区別なく、周囲の仲間すら巻き込んで、圧倒的な殺傷力を持つ炎がすべてを焼き尽くしていく。

「た、助けて……」

下半身を失い、臓物を引きずりながら兵士は呻いた。

隆起したコンクリートの道に血と腸の一部をベッタリと貼りつけながらも男は強靱にも生きていた。

薬物によって一切の痛覚を遮断された、強化された肉体を持つ兵士だった。

その肉体の一部は機械によって強化されている。

薬物なしでは生きられない呪われた狂気存在。

屈強な肉体はコンクリートの壁程度なら軽く粉碎する能力を持った兵士だった。

人外の力を持った兵士でも、下半身と泣き別れではもう助からない。

それでもしぶとく這い上がり、紅く染まった空を見上げる。

その男の背中を踏みつけ、一発の銃弾が男の頭を貫いていた。

頭を射抜かれてはさすがに即死だ。

返り血が飛んで女の褐色の素肌を汚した。

熱風が吹いて女の長い黒髪が揺れる。

女の魔族を表す瞳がランランと光り輝いていて戦場を眺め回す。

「これで終わりか……」

ほぼこの区域の掃討殲滅作戦は成功した。

残党狩りに参加するつもりはないが、女は地上に降りて周囲の戦域を見渡した。

倒壊したビル群の一角に残党の一部が見える。

殺すかつまらんな、とそう吐き捨てた次の瞬間、女が身を翻して、後方に跳躍する。

瞬時に十数メートルを跳んで、倒壊したビルの壁を蹴って向き直る。

跳躍と同時に女が立っていた場に何かが高速で飛来してコンクリートを木っ端微塵に破壊していた。

立ち上る煙幕と爆風の衝撃波と瓦礫が女を追って、女は冷静に迫る瓦礫を銃で瞬時に打ち砕いていた。

女が衝撃波に吹き飛ばされるが、ダメージはない。

地に降り立つと同時に、破壊をまき散らした襲撃者が立ち上がった。

強化外骨格のボディフレームに白銀のイメージを見にまとった女だった。

「ハン、まだ終わっちゃいないさあ、パーティは始まったばかりだろ?」

「貴様が……」

うるんそうに黒衣の女が応えた。

十数メートル、そんな距離など無意味な距離だ、この二人にとって。

世界は熱く紅に染まっていく。

全てを焼き尽くす地獄の業火のごとく、地上部隊の残存兵力がばら撒いたナパームが敵味方もろとも焼き払っていく。

黒衣の露出の高い服を着た、黒髪の銃を持った女の髪が熱風を受

けて後方にはためく。

正面に立つのは白い髪の女、ぼさぼさのロクに手入れもしていない髪が赤い炎の色に染まって、まるで髪そのものが燃えているかのようだった。

黒衣の女が魔族なら、白い女も人間ではなかった。

人口の皮膚と関節の切れ目から覗くメタリックシルバーは人工的な輝きを放っていた。

「戦闘機人……。コミチ」

黒衣の女が白い女の正体と名前を告げた。

この大戦で生み出された機械の身体を持つ戦闘用人工兵器。

先程の兵士も機械化していたが、全身ほぼすべてを機械化した兵士を戦闘機人と呼んだ。

高度化した兵器の拡散により、力がすべてという世界に置き換わってしまっていた。

平和な世界はどこに行っても存在などしはしないのだ。

「これで三回目だけ、あんたとやりあうのはさ。マナ」

「私の名を呼ぶな。これで最後にしてやる」

「はん？ あんたにあたしが殺せるかい」

「問答無用」

軽い口調の女、コミチに黒衣の女が告げて銃を乱射する。

コミチは戦闘機人の瞬発力を持って瞬動跳躍を繰り返しながら、あつという間に近接の間合いに入り込む。

白雷の如き瞬動にマナも即座に反応する。

「チッ」

白い残影を残した後に銃弾が跳躍して、コミチは黒衣の女に肉薄する位置に飛び込んでいた。

「ハッハー！！ 終わりにしてやんよ。マナ・アルカナー！！」
「舐めるな！」

ゼロ距離からの銃撃の連弾がコミチを襲うが、戦闘機人のボディを貫くには至らない。

金属がこすれあうような音を響かせた後、コミチの一撃がマナの胴体に食い込んでいた。

胃液が吐き出され、マナは片膝をつく。

追撃の拳が連弾となってマナに襲いかかり、その肉体をサンドバツグにすると、大地にヒビが走り、陥没していく。

並の人間なら一撃でミンチになる乱撃の応酬でもマナの肉体を破壊するには至らない。

両者ともすでに人外が存在であった。

その場の地盤が耐え切れなくなって崩壊を起こす。

二人とも地下の奥深く、崩落を起こした穴に飲み込まれていった。

地下世界の深く、かつては地下鉄が通っていた駅で戦いは繰り広げられていた。

闇を銃撃のマズルフラッシュが切り裂く。

繰り返される火花の応酬が起こる度に何か破壊されていく。

やがて時間差でマナの放った重力弾がコミチを捕らえると、その眉間に向けて実弾入りの銃を向ける。

「本当に最後だ。この距離では外さん」

酷薄な感情のこもらない声でそう告げる。

その冷徹とも言える瞳にコミチが映って揺らいだ。

「そうだったけ？ ケケケ」

応じるコミチは笑っていた。

「何もかも終わりさ。この世界も私達もな。人類は遊びすぎたんだよ」

「そりゃ、違いねえ。誰かが終わらすんじゃない。あたしらの世界はあたしらがぶつ潰すまで終わんない。壊すんならあたしの手でやるよ。その方が楽しいだろ、マナ」

向けられた銃口に目を細めてコミチが答えていた。

「いや楽しいとは思わんよ」

コミチを拘束するのは重力弾である。

強度を誇る戦闘機人のボディもこれを受けては身動きすら取れず、そのボディを軋ませ、ひしゃげ潰れる音が響く。

この百倍もの重力の中で話せるだけでも大したものだった。

純粹な物理の力では突破することのできない結界弾である。

重力弾は徐々にコミチを締め上げていく。

並の生物ならとっくに圧縮されて潰れたトマトのようになっていく。

戦闘機人のボディはそれほど強靱だった。

「お前は終わりだ。貴様に殺された 仲間の仇を取る」

「だったら、何故、さっさと止めを刺さないんだい？」

正面から見つめあう二人、マナは苦笑いする。

「最後の殺し合いがかったの学友とは、皮肉だな」

「馬鹿だな、マナは本当に馬鹿だよ……。あたしは戦闘機人だ。人を殺すための殺戮マシンなんだ。だから躊躇いなんてしない」

「知っているさ」

「いいや知らないね。マナ、あんたはあたしが殺してあげるううう」

コミチが叫ぶと、その身を拘束していた重力場がかき消えていく。驚愕するマナ。

否、驚愕したのは重力場が消えたことにはない。

その突如発現したコミチの背中から生えたような黒翼のオーラに對してだった。

魔法陣の結界を打ち消したのは、コミチの体に浮かび上がった禍々しい黒い術式だった。

マナはしまった、と実弾入りの銃で狙い打つが、その全弾が現れた黒い魔方陣に吸い込まれて消失していく。

まるで喰われたかのようにだった。

コミチの全身にいくつも浮かび上がったのは黒き紋様、マナの目が大きく見開かれる。

「何！？ まさかそれは……」

「へへへッ！ 懐かしいだろ？ あんたは知ってるんだよなこれを

…マジア・エレベアをさあぁっ！！」

闇を纏い、闇にその身を喰われながら叫ぶコミチの目も髪も黒く染まっていく。

その漆黒が破壊されたプラットホームを覆い尽くし同化していく。

「ククク、闇の魔法ってやつだ。こいつはずいぶんと制御するのが

大変だったらしいんだけどよ。戦闘機人に必要なのは理性じゃねえんだ。出会ったもの、すべて殺す。理性を捨てて全部を力に変える。プログラムによって制御することをあえて放棄した、出会った者をただ喰らい尽くすための呪法の呪法、それがあたしのマジア・エレベアさ。これ作った奴、吸血鬼の真祖だっけ？ ヒヒツヒ、もうすぐ全部真つ黒さあ。遊ぼうぜ、マナあ」

「その獣の姿に成り果てるのが貴様の望みか」

黒いオーラを解き放ち、眼から口から闇の魔力が噴き出している。あまりにも禍々しい禁呪の魔力が世界を侵食していく。

その姿はもう人間とは言えなかった。

「ヒヒヒ、さあ殺り合おうぜ」

「では、貴様を殺すのに私も遠慮などしない」

両腕を広げ、マナを出迎えるように立つコミチ。

マナの目が光り輝いて禍々しい気を帯びていく。

解放される魔力、ただ殺すためにその力を欲する。

暗黒の淵より悪魔としての力を解放する。

肉体そのものを化物に変じて、マナはコミチとぶつかり合っていた。

破壊の奔流が吹き荒れて大地が唸りを上げる。

地響きと共に世界は崩落していく。

戦場となった区域全体を巻き込んで大地は地響きを立てて陥没していく。

プロローグ終了

【1】時を越えた転生者 恋町小路

中等部女子寮

暗がりに電灯がついて、洗面所に淡いピンク色のパジャマを着た一人の少女が立つ。

背は高すぎず低すぎず、一五〇センチを少し越える程度。

見た目は十代でまだ幼い顔つきをしているが、その顔は端正で鼻筋もよく、バランスのとれた稜線を描いている。

惜しむらくはその美貌も寝ぼけ顔な上にパジャマも着崩していて、特徴的な白に近い灰色の髪がアンテナのように何本も立って、ゆらりゆらりと揺れていた。

あまり人前に出られるような格好ではなかった。

鏡の中で目付きの悪い女が自分を見つめていて、寝ぼけてはいるがそれが自分だと認識はしていた。

「ふわあ……。あうふあ……」

起きだした直後の初めの言葉はただの欠伸となって漏れ出ていた。この少女の本来の声は透き通るような美声売りなのだが、本人は普段からそんなことに頓着したことはなかった。

背筋と手を伸ばし、派手に欠伸を漏らして鏡の中の顔が歪んだ。

美少女もこうなっては形無しである。

だらしなく洗面所に手をついて、呆けた間抜け顔で電灯にたかる蠅を一瞥する。

ブンブンブン……

ブンブンブン……

ジジジ……

耳障りな音が狭い洗面所に響く。
照明にたかる蠅の黒い影が床に映る。

「ブンブンブン」

不意に少女の手が伸ばされて、素早く蠅を捕まえていた。
手の中で暴れる蠅、じつと指に挟んだ蠅を見つめた後、ぺろりと舌に乗せて飲み込んでいた。

ゴクリ、とその細い喉が何の躊躇いもなく飲み干す姿を見れば、大抵の人間は引くか、この少女は頭がオカシイのではないかと疑うことだろう。

残念ながら、いかれてもいないし薬物もやっていない、これがこの少女の素面の姿だった。

「ブンブンブン　フヒヒ、お腹の中でブンブンブーン」

ブンブンブン、と口の中で繰り返し、ヒヒッヒ、ひとしきり楽しむようにお腹に手を当てて笑った後、壁に背を預けて、背中を引きずるようにして座り込む。

ピンクのパジャマがめくれて背中をむき出しになるが委細構わず硬い床に胡座をかく。

華奢な体を深夜の空気がしんしんと冷やしていくが、まるで気にせず鼻歌を歌っていた。

「あーあ」

虚空を見つめていた少女は洗面所のリノリウムの床に寝そべる。
長い灰色の髪が無造作に広がる。

電球の明かりが目を刺して、薄茶色の色素の薄い目を閉じる。

床の硬さも、体の冷たさも気にすらしていなかった。

世界は時間を止めている。

平和な空間だ。

平和すぎて気が狂いそうだった。

初めにお前らに言うておくことがある。

あたしの名前：何だっけ？

キヤハハ、嘘嘘、名前忘れるわけないだろ、記憶喪失とかないな
いって。

ちよつと前まで近い状態だったけどな。

あたしの名前は恋町小路だ。

生前の、いや前世かな？ その時の名前はコミチっていうんだ。

んで今は小路、ほれおんなじ名前だよ。

偶然かって？ まあ偶然じゃねえんだなこれがよ。

実はあたし最近まで大怪我して入院してたんだよね。

どれくらいって？

半年らしいよ、うん、まあ入院する前のことは最近になるまで忘れてたみたいでさ。

でも記憶喪失じゃないぜ、記憶喪失つてのはよ、個としての記憶を持つ存在が連続して持つ経験を脳のどこかに置き忘れた状態ってことらしい。

そしてだ。

あたしはそれが記憶喪失じゃないとはっきり断言することができ
るんだ。

何故なら、この小路が生きてきた記憶、あたしの記憶、それには

はつきりとした違いがあるからなんだ。

病院で小路として意識が覚醒した頃、あたしは全身を拘束されて、ついでに包帯まみれ、何があつたかはわからないが、医師も看護婦も避けやがるしまともに口を聞けるのなんていなかったな。

一応両親から事故に遭つたことは訊いたし、自分がまたこの世界に舞い戻ってきたのだと確認することができた。

ああ、前世でもないし、生まれ変わりでねえ。

体が治り、見た目まで変わる頃にはあたしはすべてを思い出していた。

ところで話を変えて、恋町小路は恋とか愛とかそんなものは全然わからないし興味もない。

そしてまかり間違つても乙女回路なるものも存在しない。

相手が男だろうが女だろうがだが、いっちょ前に色欲は普通に存在する。

しかしまあ、中学生の貧相な体に欲情するのは変態さんで口リでツルペタ好きという一部のマニアック向けな嗜好を持った人種であるろうと想像に難くないのであるが、その手のオタク趣味でも恋町小路は避けるのではないかと思われた。

つーか、こんなのに惚れる男は皆無なんですかあ？

あたしはパジャマを着て洗面所の鏡の前に立つた自分をまた眺めていた。

体は冷え切っていて、正直立つのも面倒くさかつたんだが、壁に背を預けてだらけていた。

ああ、クソ、生身の肉体つてもろくてやなんだよな。

人生やり直すなら戦闘機人のボディ持ち込みを今度は提案したいところである。

まあ次なんてないんだけどさ。

さつきまで床で寝てたせいか、髪はボサボサであちこちが跳ねている。

ちなみに癖毛で酷いときは三本くらいアホ毛アンテナが立つ。

後かなり目付きは鋭い。

やぶにらみじゃあないが、特に普通にしてても睨まれてると思われるらしい。

色素の抜けたような灰色の髪と薄茶色の瞳に、その不健康で白い肌は一目でお前日本人じゃねえだろと突っ込まれそうだが全然違う。

あたしは純粹なる日本人で戸籍も日本人だ。

フルネームで恋町小路。

麻帆良学園中等部1年A組32番。

32のドベになってるのはクラスへの途中編入があったせいだ。

普通は入学直後に編入生なんて入るわけがねえ、がねえが、入っちゃまったんだから仕方ねえ。

番号は変えられないらしいから、つーわけで、一番ケツのドベなわけね。

まさか自分がまた麻帆良学園に通うことになるとは思ってもいなかった。

何だか、正直騙された気分だが、恨みつらみを言いたい本人は遙か先の世界にいたりするわけよ。

しかも、もつとも関わってはならないデンジャークラスに入っちゃまうとは思ってもいかなかったわけよ。

初めに、いや二回目か、とりあえず、言っとくわ。

あたしは未来人だ。

世界がぶっ壊れた後の、戦争やってた未来からやってきた、とは言っても、別に未来を変えるために過去をどうにかしようなんてま

ったく思っでねえ。

つーか、不可能だ。

死ぬ、死んでしまう。

今のあたしは生身で、魔法なんて使えないし、連中と戦えるような特別な力も持っていなかった。

今いる世界に何が起きるのか、わかっているのは世界が崩壊する何かが起こったのが、この麻帆良学園に原因があるってことだけだ。

鍵となるのはネギ・スプリングフィールドっていう、うる覚えだが一〇才、あれ九才だっけか？　はいいとして、子ども先生に変わりはねえな。

そして魔法使いでもある。

あと数年かすれば誰もが知る超有名人になる。

未来じゃ滅茶滅茶悪名高い大悪党である。

会ったことねえけどな。

犯罪者集団率いるボスみたいな感じな。

少なくとも、あたしのいた時代ではそうだった。

この世界でどうなるのかなんて知らんし、第一、まだイギリスにいるみたいだ。

んで、もう一人は超鈴音。

もう一人の大悪党な。

この女のせいであたしの生きた時代は地獄同然だった。

その引き金を引いた原因ナンバーワンだな。

まあ、いなくても遅かれ早かれ地獄だったんだろうけどな。

それは置いといて、こいつは全世界に魔法をバラした張本人だった。

さて、何があったのかちと話しくわ。

ぶっちゃけ言うと、地球と魔法世界との間に起こった戦争の末に

人類は衰退した。

文明も何もかも壊れちまった世界で生き残った……いや死にかけていたあたしは助けられた。

その頃の蘇生技術は脳みそさえ残ってりゃ、生体パーツの組み合わせで生存することができた。

おかげで生き残れたけど、手術の過程で体の色素が抜け落ちまった。

手に入れたのは戦闘機人のボディだった。

あたしの年齢は正しければ四〇になる。

あ？ ババアだと、ちよっと面貸せや。

まあそれも置いておこう。

今から数年以内に世界を崩壊させる何かが起こり、魔法世界はぶっ壊れ、地球も無事ではいられなくなる。

超鈴音はそれを止めようとしてた、いや崩壊後の混乱を避けようとしていたのかよくわからないが失敗した。

いいか、奴は失敗したんだ。

魔法を全世界にまき散らして無責任に失敗した。

魔法バレによって世界に魔法が溢れた。

そして起こるのは戦争さ。

地球人の間で魔法の取り合いと軍事利用がなされ、終いには殺られる前に殺れ、獣のように喰らいあう醜い戦争が起こった。

それから数年で魔法世界が崩壊して、行き場を失った奴らは地球侵攻をしてくる。

いろんな事情で受け入れようがない、どちらかが死に絶えるまで続く大戦争勃発さ。

そしてやつちまった。

争いは憎しみを生んで、その連鎖は大量破壊兵器の使用を決断さ

せた。

それを止めようとして新たな暴力が振るわれて壊れたのは世界。核よりも恐ろしい魔導兵器の投入によってすべてを焼き尽くす業火に世界は包まれた。

わずかに生き残った人類も文明も何も失って滅びるだけだった。

そんな時、あたしはあたしを助けてくれた博士からこの世界がどうしてこうなってしまったのか、その始まりの話を聞いたのだ。今となってはもうどうしようもない事実。

そして言ったんだ。

タイムマシンを作ったってな。

時空を越えるアイテムなんてのは昔からあった。

あつたけどそいつを使って戻ってきた奴なんていなかった。

正直、子どものおままごとでしかなかった。

何だ、博士の戯れか、とあたしは思った。

過去でも変えたいのかい？ 博士と聞いた。

でもあの人は弱々しく笑ってこう言ったんだ。

救ってあげてほしい、***をとってな。

呆れてものが言えなかった。

でもいいさ、どうせ、あたしは一度は死んでるんだ。

タイムマシンが途中でぶっ壊れて死んでも、ここで死んでも同じことだ。

だから、いいよって答えた。

そしてあたしはタイムマシンに乗ってこの時代にやってきた。

懐かしくも幻想の平和が仮初めにもある時代に。

話はまだあるんだ。

このあたしがどうしてこの時代に適應できたのかの話をしよう。

この肉体に転移したとき、ああ死んだと思った。
タイムマシンは正確に恋町小路に『転移』した。
聞いてねえよって思ったね。

まさか大崩壊前の自分自身の体に入り込んでしまっなんてな。
その事故で一二才だった中学入学前の恋町小路は死亡した。

そして未来からやってきたあたしが融合した。

ぶっちゃけ、胸糞の悪い話なんだが、まあ、あたしは何とか生き残った。

精神が融合したせいで、あたしの経験した世界の記憶を見たせいで元の恋町小路の精神は崩壊し、自ら精神の死を選んだわけ。

あたし？ あたしは凶太いからね、脳みそかき回されたぐらいで死にはしない。

実際されたらアレだけどさ比喻だよ比喻。

元の恋町小路は脳をそんな風にクラッシュされて死んだのよ。

南無阿弥陀仏。

他人ごとだって？ まあ仕方ないだろ？ 生きるか死ぬかの瀬戸際なんだし。

あたしも追い出されたら死ぬからな、軽く叩き潰しちまった。

んで、その事故は中等部入学半年前の頃だった。

二ヶ月ほど植物状態で、それからしばらく記憶が混濁してたな。

誰が誰だかもわからねえ。

見舞いとか来たらしいんだけどよ、まったくわかんねえや。

意識が戻って、それまで身動き一つ取れなかったが、リハビリで何とか動けるようになった。

それからだな、本当の自分の記憶を思い出したのは。

恋町小路はごく普通の中学1年生で、髪も目も黒かったが、謎の

事故に巻き込まれて大怪我をした。

意識不明の間に身体特徴の書き換えが行われ、あたしが気がついたときには前の世界で見慣れた姿になってたわけ。

決定的に違うのは若いつてことだな。

別に若いからいいわけでもない。

中学生のボディの貧弱さにはりハビリ中に何度も泣かされた。

そう言えばさ、一つ思い出したんだ。

ああ、思い出したさ、恋町小路は内向的で常に独りきり。

本当に忘れてたよ、児童書を読むのが大好きな文学少女だったとかね……。

なにせこの十数年後には戦闘機人としていくつもの戦場を渡り歩いた殺戮マシーンに変わり果てるのだから人生ってわからないね。

ああ、戦闘機人てのは魔法使いと正面から殺り合うために開発された地球側の兵器だ。

沢山殺したよ。

魔法を使うのも、戦闘機人も同じくらい殺した。

戦争の末期はもうただの殺し合いで、ただの人が生き残るなんてとうてい無理な世界。

戦うすべのないものはみんな死んじまったよ。

あたしの両親も親戚とか、元のクラスメイト達もみんな死んだ。人の死を何度見たのかも憶えていない。

心なんてとつくに壊れている。

だけどおかしんだよ。

狂ってるはずなのにさ、あたしは何でまだ生きてるんだろう？

笑い声が漏れていることに気がつく。

ああ、何であたし、この体で生きててよかったなんて思ってるんだ？

「フッフハ、へへ、へ、おつかしいよねえ〜 アツハハハツ！」

水道の蛇口を強く捻ると水が派手に迸ってパジャマを濡らしている。

重い染みとなって濡れたパジャマが肌に張り付き下着を不快に濡らした。

水が受け口からこぼれてぴちゃぴちゃと足元に溢れていく。それに構うことなく鏡の前で笑った。

「おい！ 恋町うるせーぞ！」

「ハン？」

振り返ったあたしの顔を思い切り女が張り飛ばした。

「おつまえ、頭おかしくなったのか！？ 水止めるバカー」

笑みを張り付かせたままの、ずぶ濡れなパジャマ姿のクラスメイトを見て、同室の長谷川千雨は水道の蛇口を閉める。

「まったく、おめーは常識ないのかよ！」

「あ？」

あたしの目の前にいるのは同室のクラスメイトである、長谷川千雨だ。

細い手足、小さな頭。

いつでも殺せる、無防備な後ろ姿を晒して床に雑巾をかけている。溢れた水が多すぎてシャワー室に水を押し出している。

口の端を吊り上げて笑う。

「あー、お前邪魔！ あっち行ってる。それも脱いでけよ！」

「へいへい」

千雨は小路の方を振り向きもせず、後ろ手にしっしっしと追い払うように手を振る。

めんどい。

あたしはパジャマを適当に脱ぎ捨てて、部屋に戻るとベッドに潜り込む。

後ろから千雨のバカ町バカ町、と罵る声が聞こえるがどうでもいい。

今、午前四時かと時計を確認する。

睡眠なんて二時間ありや十分だな。

スリープモードに移行し、一瞬であたしは眠りについた。

「あー、くそ町め。貴重な睡眠時間返せよゴラあ……」

何とかあのバカ女が水浸しにした洗面所を片付けて、自分の濡れたパジャマを乱暴に脱ぎ捨てて、洗濯かごに突っ込んで千雨は部屋に戻る。

が！ またかよ！ この女、常識つてものがなさすぎる！

千雨はこめかみに血管が浮かぶのを軽く押さえる。

クソ！

「こ、こいつまた……。そこは私のベッドだろうがー！」

千雨のベッドを占領するのは、後二時間は絶対起きないであろう小路だった。

その日の朝、寝不足な千雨は疲れきった足取りで登校するのだった。

【2】のどかのトモダチ作戦(前)

私の名前は長谷川千雨。はせがわちさめ

ごく普通の中学一年生でごくごく普通の家庭で生まれ育ったピールだ。

実家は麻帆良一番町にある長谷川洋裁店。

両親は健在で兄弟姉妹はいない。

コスプレが趣味で、自分でも実家で衣装を作るくらいのはする。

最近はパソコンが趣味で、こっちが私にとってのもう一つの「リアル」だった。

私は超常現象なんか信じないし、薄っぺらな人間関係なんてもも信じない。

バカみたいに群れるなんてゴメンだね。

いつだって頼れるのは自分自身の感覚だけだ。

このイカレタ世界で信じられるものは目の前にあるものだけだ。

だが、そんなもの吹っ飛ばすくらい私の住んでる町は、麻帆良はぶっ飛んでる。

超常現象、怪奇現象なんて日常茶飯事、毎日どこかで何かが起こってる。

だが誰もそのことで騒ぎ立てねえ。

いや、おかしいだろ！

町中で原因不明の爆発騒ぎがあっても次の日には報道すらされねえ。

ガス爆発で済まされちまう。

ありえねえよ、地上数十メートル上でガス爆発するわけがねえ。それを誰かに言っても、こうだ。すこかったよね！ だとさ……。

なあ、実はもしかしておかしいのは私なのか？

頭がいかれてるのは実は私で、この世界のこれが常識なのか？

ありえねえ……。

わかつてはいるんだ、それはありえねえ。

私は正常だ。

ここがおかしすぎてみんな狂ってることにすら気がつかないのか？ そうじゃなきゃあの馬鹿でかい木があるのだからって異常だと思うはずだ。

この町には小学生の頃から住んでる。

私の両親はまともな方だったと思っている。

なのに町に出ておかしと思うことがあっても、この人達は全く気にも止めない。

その時初めてこの世界の異常性に気がついたんだ。

ありえないものがあるのにみんな知らんぷり。

この町には何かがある。

異常を異常と思わせないように誰かが仕組んだ仕掛けがあるんだ。危険過ぎる。

声を高らかにばらしてやりたくなる。

だがそれをすればどうなる？

ハハ、私消されるかもな？

私が存在した証拠すら残さずに、長谷川千雨という女をを消し去ることなんて簡単なことなんじゃないのか？

だから私は何もしない。

非常識な世界から背を向けて目を閉じる。

そして耳を塞ぐ。

そうしていれば少なくとも何の不自由もない毎日を過ごすことができる。

……そのはずだった。

非常識の塊のこの女が現れるまで……。
灰色白髪頭の暴力が服を着た女だった。

「よー千雨たん、ノート見せろよ。宿題やってねーのよ」
「おい、バカ町、貸すなんて言ってるねえぞ」

私は何故か隣の席になっちまった恋町にガンを飛ばすが、知らぬ風というふうにバカ女の手が千雨の両肩を揺する。

「あん？ 宿題終わってんだろ？ ほらなんだっけ？ ノーブレスオブリッジだったっけか。持てるものは持たざるものに分け与えるんだよ。フー訳で見せな」

「それが人にものを頼む態度かよ。私は貧民なんだ、お前いい加減にしろ！」

そう告げる私を無視して鞆から中身を掴んでひったくった女、恋町小路を睨みつける。

「何だ、けちけちすんなよ」

クソ！

恋町が掴んだノートと教科書が何冊かまとめて落ちる。
パラパラと教科書がめくれている。

今日もこうして、まだ新品に近い教科書がバカ女に汚されるわけだ。

「んーどれだ、宿題のノート？」

あーム力つく。

バカは構うだけ無駄だ。

対処法は一つしかねえ。

正しい答えは、望むものを与えてやる、だ。

それで少しばかりの安寧という時間を買うわけだ。

こいつは私の前に現れた時間泥棒という奴だろう。

そんな児童小説あったよな？

「これだよバカ」

差し出したノートを恋町が遠慮もせずを受け取る。

いつか絶対、この女に復讐をしてやるうと誓う千雨であった。

「お！ フへへ、サンキュー千雨ちゃん。口ではいよいよ言っても、熱く感じてるのね」

「おい、キモイわ！ 何が感じるだ！！」

「キャハハ！ いやーん、千雨ちゃん照・れ・て・るのね」

ぐっ……、と千雨は思わず拳を握りしめる。

な、殴りてえ……。

その時、私は視線を感じる。

さつきからずっと、こっちを見ている。

何だ？

話しかけてくるわけでもなく、好奇心から見ているわけでもない。こちらが視線を向けると、さりげなく外を眺めるふりをして千雨の視線をかわした。

窓際に近い席、そこに彼女は座っていた。

あれは綾瀬夕映、出席番号4番。

彼女が見ていたのは私じゃない。

綾瀬と私には何の関連も共通点も見当たらない。

同じクラスになってから話したことなどほとんどないのだ。

つまりは消去法だ。

綾瀬が見ていたのは、つまりはあのバカ女、恋町小路である。

そのバカ女はノートを広げて自分のノートに写している。

おい馬鹿やめろよ…思いつきり堂々とやってんじゃないよ。

話しかけるのも嫌だ。

私は頭を抱えて目を閉じる。

クソ眠い……。

「ねえ、千雨ちゃんよお」

「うるさい」

私はそのまま寝ることにした。

「おい、バカ町。代弁しとけよ」

「ん、わかった」

奴はノートを書き写しながら答える。

こつこつこの餌付けっていいのか？

まあいいや……、どうでもいい。

そして千雨はそのまま睡魔に身を任せていた。

綾瀬夕映は思う、世の中は常識だらけでつまらない。

そう思っていた。

しかし意外と、非日常というものはすぐ側に転がっていた。

そつという形で思い知るといふのは不本意なことだけど仕方がない。

祖父が…死んだ。

祖父の死は、私の世界がいかに脆弱なものであるかを思い知るきっかけとなった。

人が死んだらどこへ行くのか？

大霊界？

死後の世界は本当にあるのか、なんて考えたこともなかった。

でももしかしたら靈魂が住む世界があるのかも知れない。

もし今死んだら、私は祖父に会えるのか、それとも違う世界に生まれるのか。

考えはまとまらない。

葬儀会場を後にして、骨だけになった祖父は軽かった。

綾瀬夕映　それが私の名前だ。

でもその名前に意味はなく、ただそこに存在する抜け殻にすぎない。

意味のある存在であるのはそれを認識する者がいるからこそだ。

誰にも認識されない存在、それは幽霊と同じだ。

私はもはや幽霊と同じだ。

そこにあつて存在せず、誰からも知覚されない。

私自身が非常識で非日常に生きる存在に変わってしまった。

それを望んだとも言える。

ユエに、この世界に意味はなく、すべてはくだらない

私の中の常識というタガが外れたのは祖父の死がきっかけだった。でも本当は、「彼女」がいち早く「向こう側に」行ってしまったことが原因だったと言えるかも知れない。

何故そうなったのか、そうなってしまったのか、事故なんて何故起こったのか、回避できなかったのか、解決方法など存在しない。

それはすでに起きてしまったことだった。

恋町小路は綾瀬夕映の幼馴染だ。

引っ込み思案の本の虫で、半ば幻想の世界に足を突っ込んだ、私を理解してくれる唯一人の人物だった。

そして愛すべきビブリオ・マニアでもあった。

その彼女は今や病院で生死の淵を彷徨い、二度と戻らぬかも知れぬ世界に旅立とうとしている。

いや戻るのかも知れないが、植物状態の人間が生きていえると言え
るのか、私にはわからない。

世界に飽いた私に、世界はどれだけ非常識なメルヘンがあるのか
を語ったのも彼女が始めてだった。

児童文学に手を出したのは彼女がきっかけだった。

非常識は素晴らしい。

それを私に刷り込んだくせに、本人はいとも簡単に非常識なる世
界への片道切符を切って、あちらの世界に行ってしまった。

これほどの非常識はない。

ああ、そうだ、私は彼女という存在と同等の存在になりたかった。
だから幽霊で構わないのだ。

中学に入学し、つまらぬ常識の世界で非常識に浸かる私は周囲と
は浮いた存在となっていた。

何せ私は幽霊なのだ。

そして今日もしつこく宮崎のどかが話しかけてくる。

ああ、うるさいですね。

席を立った私を追って、宮崎が追いかけてくる。

知ったことではないのです。

そして職員室を通りかかり、一人の女生徒の後ろ姿を見つけた。
白く、どこまでも白のイメージを身にまとう妖精だ。

そしてその横顔を見てしまった。

ああ、何故

彼女はここにいて。

ここで笑い。

そして存在するのか？

それは私の知る恋町小路ではなく、人格もまるで違う上に、容姿はそのものでありながら、その色素をすべて抜き出されたようであり、傍若無人なまでに周囲の常識を破壊する存在になっていた。

そして私を無視するのも非常識だ。

いや、目線で私を認識しているのはわかる、が、決して踏み込んでこないのが余計に気になって仕方がない。

まるで、さあ、ここからが非常識の境界線だ、踏み越えてみるがいいとあざ笑うかのようだ。

彼女という存在は、彼女が変わってしまう前から常識の一步外にいた。

そして嫌でも自覚させられるのだ。

私は結局、常識の世界に生きる一人の人間なのだ、と。

そして今日も一言も話しかけられなかった。

今日こそは夕映さんのお話を聞きたいなと思ってたんですが、また逃げられてしまいました。

夕映さんの姿は図書館島でよく見かけるので、何度かお話ししたいなと思ってたんですが、どうにも私はとろいのか、いつも逃げられてばかりいます。

パルなんかはやめときなさいって言うんだけど、夕映さんは本がとてもし好きな人です。

パルっていうのはクラスメイトの早乙女ハルナで、同じ図書館探検部に所属しています。

こないだも私が借りたいなと思ってた本を夕映さんが全部借りていつて、すぐに返却にきました。

凄く読むのが早いんです。

そしてお話ししたいなと思ったんです。

それに彼女なら図書館探検部に入ってくれるかも知れません。

だから、彼女が何に興味を惹かれるのかをこの一週間観察し続けました。

「おい、のーどーか？」

「はい？」

コツンとノートの端が宮崎のどかの頭にぶつかり、のどかが見上げると早乙女ハルナが横にいた。

「また恋煩いかいな？ くくく、めくるめく百合の世界…宮崎のどかが愛するのは文学少女、綾瀬夕映。二人は禁断の恋に落ちるのであった」

のどかの隣に座り、ノートを広げたハルナが即興でデフォルメされたのどかと夕映を描いて抱き合わせると、赤くでハートマークを描いてみせた。

「ち、違うよパル。わ、私は探検部に入って欲しいかなって…」

「はいはい、でも無理っぽくない？ あの子、のどかから逃げまわってるし、ラブラブアタク作戦大失敗っぽくない？」

「ラ、ラブラブ…そんなんじゃないってば」

「お前は何でいちいち赤くなるかな……。ははあ、意識しすぎて、本当に好きになってしまったと？」

からかうハルナにのどかは懸命に否定するのだが、のどかを出汁にからかうのがハルナの性分なので、いつも適当に美味しくいただくのである。

「もう違っつてば〜」

「あ、見てる。やっぱり例の子」

顔を赤くしてそっぽを向いたのどかにハルナが囁いて、最後尾の席に視線を投げかける。

「え?」

綾瀬夕映の行動パターンを観察していたハルナとのどかが発見した、夕映の教室での行動は、ある人物への注目で語ることができる。他の生徒はそんな事実には全く気がついていないが、ストーリーのごとく綾瀬夕映を見続けてきたのどかには、その人物こそがキーなのだと理解することができた。

即ち、綾瀬夕映は教室ではある一人の人物に対し、何らかの深い思いを抱いているという事実だった。

禁断の恋とかそういう類のものではないような気がする、というのがのどかの見解で、何となくだがそれは当たっているような気がした。

しかし将を欲するとすればまず馬からと、そんな言葉を思い出して、宮崎のどかはその人物、恋町小路に接触を試みることを決めたのだ。

恋町小路は春の中途からの編入生だ。

長らく事故で入院していたらしいが、病弱な様子は見られない。むしろ活発と言っていいだろう。

よく委員長が頭を悩ます一人でもあるので、クラスではかなり目立つ存在となっていた。

長谷川千雨とは同室らしいが、千雨とのかの接点はクラスメイクトという以外、あまり見当たらなかったから、間に入ってもらうのは難しく思えた。

まあ見ていて恋町小路はかなり破天荒な人物であるのはわかる。

インドアタイプの本好き少女であるのどこには、近づきにくいタイプの少女である彼女は、かなり適当な人物でもある。

まず行動が女っぽくないし、ガサツの極みである。

服もアイロンを当ててないのかいつもヨレヨレで、乱暴な男っぽい言葉も使う。

そうでありながら、その容姿はやたらと目を引いて、人目を引かずにはいられないのだ。

小路の美しい声に、当初合唱部に人間が突撃をかけていたが振られたようだ。

唯一、長谷川千雨だけが、その猛獣を御せるのだという噂がすでに事実のように知られていた。

しかし運動神経は抜群で、一年A組の五天王の一人と言われている存在でもある。

のどかの観察の結果、彼女は食い気に弱いことが判明していた。釣るのは食券である。

私は握りしめた食券を手に、いざ尋常に勝負！ という心持ちで彼女を追うのだった。

「あの、恋町さんっ！ 今日お付き合いですか？」

言った、言ってしまった。

授業の合間の時間、トイレから出てきた彼女に食券を持った手を

差し出して、のどかは渾身の思いで要件を告げた。
周囲からどよめき上がる。

まさか、宮崎が、だと？

のどかは途端に急に恥ずかしくなる。

勢いで突っ走って走ってしまったけど、今のって告白みたい？

思わず頬が熱くなり、のどかは視線を下げていた。

目の前の彼女は色素の薄い瞳をのどかに向けて、その手から食券を受け取る。

「っはん、子猫ちゃん、ゴチになります」

と、のどかの耳元で囁いた。

口元に少し意地悪な笑みを浮かべた彼女が去って、のどかは猛獣に睨まれた兎のような気分だった。

怖い、でも、彼女が夕映さんの何なのかを知るチャンスを手掴んだ。

もし仲良くなれば夕映さんも友達に、あわよくば同じ図書館探検部に、というハルナが巡らせた作戦だった。

第一作戦は成功しました。

これからが本番の第二作戦です！

【3】のどかのトモダチ作戦（後）

学食

「フシシ、いただきまーす」

目の前でバカ町が何杯目になるかわからないプリンを貪り食っていた。

食い過ぎだ、それに遠慮も全くねえ。

デリカシーもクソもない。

まあ、元からそんなものがこのバカ女にあるわけもないのだが、それにしても、と千雨は目の前でニコニコしている宮崎のどかを訝しんで見た。

恋町小路、長谷川千雨、宮崎のどかの三人がいるのは学食だ。

学食と言ってもマンモス学園の生徒達数万人を支える学食であるから、学食の棟の至る所が食事処となっている。

小学生以下は給食がメインだが、中等部から大学部まではこの学食を利用する。

中には弁当組もいるが、そういう層もここではちらほらと見ることがができる。

学部とりどり、多種多様な光景がすでに日常だが、未だに千雨は慣れないでいる。

むしろ、周囲の柔軟性が信じられない。

ああ畜生、昼飯がただなんて言葉に惑わされるんじゃないやなかった。

千雨は悔恨するが、実際の所、千雨の懐事情はピンチであったから、バカ町が食券を見せびらかせながら奢ってやるよ、という誘惑に勝てなかったのだ。

常に千雨の財布は貧乏からつけつで、趣味のコスプレやパソコン関係で消えてしまう。

学生には少しばかりきつい日々である。

ああ畜生、もう次からは絶対に付き合わないからな！

そう千雨は心の中で吐き捨てる。

そして目の前にいる宮崎のどかを警戒する。

いったい、この女に近づいたのは何が目的なんだ？

絶対に怪しいし、食券を丸ごと賄賂に使うなんて腹黒には見えなかったんだが、手口がどうも嫌らしい。

宮崎らしくない。

らしくないと思うが、実際に千雨は宮崎のどかという人間を知っているわけでもなかった。

ただ怪しいという気持ちを抱かずにはいられない。

何せこいつらに接点など欠片もないし、話しかけたことも話しかけられたのも初めてだからだ。

私は常に一步下がって関わらないようにしてたし、バカ町もそんな素振り一つなかった。

例外はこいつが馬鹿騒ぎして周囲が巻き込まれるくらいだ。

関係あるとしたら、あれか、綾瀬夕映か？

宮崎のどかが綾瀬夕映と何故か接触しようとしているらしく、その現場を見たこともあるが、どうも相手にされてないようだ。

そしてその綾瀬夕映はバカ町に何故か執心だ。

コレは何かある。

別に関わりたいわけではない。

だが知らないで巻き込まれるのと、知った上で巻き込まれるのとではわけが違う。

私はピエロに成り下がるのはごめんだ。

何も知らずに利用されるのもだ、宮崎のどか、何を考えてるんだ

お前は？

私は宮崎のどかを監視することにした。
警戒するに越したことはない。

それが恋町か綾瀬に対する悪意か好意かは不鮮明だが、厄介ことはゴメンだ。

自分の身は自分で守るしかねえ。

千雨はお茶を啜りながら一歩引いた視線で二人を観察することにした。

何だ、千雨ちゃんは機嫌悪いな？ せっかく誘ってんのによ。

あれか、腹痛か、あの日なの？ と聞いたらデコピンが飛んで来る。

にしても宮崎のどか、か、どういっつもりかは知らないが、食券丸ごとなんて太っ腹だろ？

小路はプリン五個めをたらい上げる。

小路の懐には食券二四枚綴りが収められている。

すでに五枚程使っているが、普通は二枚も使えばデザートも付いて腹を満たすには十分だが、小路は遠慮なく食券を切る。

告白なんてもんじゃないことは明白だ。

明らかに目的がある。

ハン？

まあ何が目的でもいいけどな。

目の前で恋町さんが美味しそうにプリンを食べてます。

フフ、好きなんですかねえ？ 何というか豪快です。

それに何となくサバサバしてて意外と話しやすい人でした。

一緒に長谷川さんもついてきたけど、何だか機嫌が悪いのか、私を少し睨んでいます。

何か嫌われるようなことをしてしまったのでしょうか？

それにしても、自分でも少し大胆なことをしてしまいました。

宮崎のどかという人間は自分でも思うのですが、少し奥手すぎる人間です。

積極的に話かけるのは大の苦手です。

でも引いてばかりもいられません。

私は夕映さんを知りたい。

そして彼女に繋がる人物は恋町さんなんです。

だからどうしても、ちょっと強引でも関わりたいと思いました。

今はちよつとでいい、これからもこの人に話しかけるきっかけは作りました。

とはいっても作戦はパルが立てたんですけどね。

長谷川さんの目付きが厳しいです。

もしかして気づかれちゃった？

ど、どうしよう。

「千雨ちゃんよお、のどかちゃんが怯てんじゃんよ。そう睨むなって」

「あん？ ドライアイでさ、目が乾燥してんだよ。細めにして乾燥を防いでるんだよ」

「あの、そうなんですか？ これ使ってください」

のどかが口を出し目薬を差し出すのを、一旦戸惑うが千雨は受け取る。

「千雨たん、あたしが差してやんよ」
「触んなつっーの。自分でできるわ!」
「うおっひよっひよ」
「うぜえ!」

千雨は立ち上がってテーブルの端に行ってしまうが、小路がその背にしなだれかかり、その脳天に千雨のチョップが振り下ろされるのを、のどかは啞然として見守っていた。

喧嘩するほど仲がいいというのはこういうのかな。

そう思いながら、のどかはこの二人とも友達になれるといいなと思っていた。

放課後

「パル」

遠くからのどかが手を振って、ノートにネタを描き込んでいた早乙女ハルナはそれを閉じて腰を上げた。

のどかの様子からして、まあファーストコンタクトは上手く行ったようだ。

穴だらけの工夫のへったくれもない作戦だが、のどかがシンプルで恋町がバカなので助かった。

単純に食券で釣るという行為は警戒はされるだろうが、表向きはお友達になりましょう作戦だから、最初の接触が上手く行って警戒が解ければ問題ない。

もつとももつ一つの本来の目的である、綾瀬夕映に近づく目的があるのだが、余計な情報は与えず、こちらが最大限の利益を得られればいい。

私ならば意図を隠して接触することもできるが、余計な腹の中を探られるのがオチだろう。

隠すものが多いほど、情報を引き出す対象からは警戒されやすい。その点で、脳天気なほど黒さが見えないのどかでなければ作戦は成功しないと踏んで、私は待役に徹することにしたのだ。

のどかの脳天気さは折り紙つきの人畜無害、初対面の相手でも警戒心を抱かせない天然である。

早乙女ハルナはずれた眼鏡を直す。

待ち合わせの世界樹広場は今人は人通りは閑散としていた。

頬にかかる髪をうっとうしく後ろに払って、やってきたのどかに合わせて歩き始める。

二人して向かうのは図書館島だ。

つかず離れずの微妙な距離感は二人の間の不文律のように保たれている。

「上手くいったかい」

「うん、パルのおかげだよ」

「ひしし、食券分の働きをしたようでは何より」

「あ、あれのお金出すよ！」

「あん？」

「だってお金……」

「あれ、景品でもらったんだよ。春の漫画コンクールでさ。学生組合の景品交換ポイント貰ったんだよ。それで食券貰ったから元手なんてかかってないしさ」

「え、そうなんだ。パルすごい」

のどかが鞆を抱いて素直な称賛の声をハルナに贈る。

その素直な反応がハルナには少し恥ずかしい。

言ったことは真実だが、少しは疑うことを知らないと世の中は渡

っていけない。

そんなことを思いながらも、ハルナ的にはのどかにはあまり変わって欲しくないものだと思うして、矛盾する己の思考に苦笑いする。天然というものは知らずの内に影響を受けているものらしい。

「まあ気にするなっでこと、OK？」

「うん」

路面バスがやってくるのを二人して待ち、図書館島方面のバスに乗る。

いちいち切符を買う必要はない。

学生証は路面バス利用でのパスカードとして使用することができ、支払いは月で固定されているから利用しなければ損である。

それでも月あたり千円にもならないから、路面バスは常に満帆である。

外周の手すりの部分に捕まって、二人は風を受けながら図書館島の方を向いていた。

早乙女ハルナと宮崎のどかは図書館探検部の新人である。

図書館探検部とは文字通り広大な図書館島を探索し、新たな地図にその足跡を残すことを目的に作られた巨大サークルであり、年齢、学年を問わず、様々な目的を持った人々が所属していた。

宮崎のどかは言わずとも本の虫であり、常に本を呼んでいることから「本屋ちゃん」というあだ名がすでに定着していた。

早乙女ハルナはどちらかというと漫画研主体のだが、ネタの宝庫として図書館島はまさに宝の山であったから、図書館探検部には知り合いの先輩に誘われたこともあり入部していた。

同学年の同クラスのよしみから、二人はいつの間にかつるむようになっっていた。

麻帆良湖から図書館島が望めて、渡るのに橋を利用する。

異国風情たつぷりの情緒溢れる建物群なのであるが、建物の天井から端、地下に至るまで本で埋められた常識世界から一切隔離された場所だった。

「新人！ 救出物資をA館に運んでくれ、B館が倒壊の危機だ！」

「は、はい」

「えー、なにーなに？」

着くと同時に現場は修羅場だった。

後ろからがつちり両肩を土方風の大学生部員に掴まれて、二人は早々に積み重ねられた本の山へ連行されていた。

周辺には本が散らばっている。

それを一冊ずつ丁寧にのどかが拾って埃を払う。

ポンポン、埃が舞う。

「あー、バツクれない……」

「あはは……。パルさ」

「ん？」

「パルは何で図書館探検部に？」

「何で？」

そんな事を今更聞くのか？

ハルナはのどかの意図を測りかねる。

本を抱えたままのどかが別の本を拾う。

のどかの伸びた前髪がたれて顔を隠す。

その横書を眺めながら、ハルナは図書館探検部に入った動機は何だったのかなと思いつく。

「何ていうかさ、最初はどつでもよかつたんだよね」

「うん」

「特に本探しとか性分じゃないしさ、ネット漁ればネタなんていくらでも見つかるじゃん？」

のどかはしゃがんだまま、そのまま動かずに、じつとハルナの言葉に耳を傾けている。

「でもなんか、入学の後とろそうなのが変なのに勧誘されててさあ
「はい？」

中等部編入の後、新規部員を獲得しようとする各部の勧誘員達がこぞつて一年生をターゲットに獲得しようと我先に声をかけていたのだ。

多分に漏れずハルナも捕まった口だが、元より漫研に入るつもりでいたから適当にあしらっていた。

図書館探検部もその一つで、知り合いの先輩からもらったチラシをポケットに突っ込んでいた。

本人としては当初は図書館探検部に入るつもりなどこれっぽっちもなかったのだが。

そして絡まれながらも熱心に変なコスプレ兄ちゃんの話に熱心に聞いていたのどかと会ったのだ。

入学時にぼーっとした奴がいるなと思ったその少女が怪しげなコスプレに勧誘され、困り顔で断り切れない姿に合を煮やして割り込んだのだ。

「えと、勧誘の時の？」

「そうそう、お人好しが断りきれずにいたからね。貰ったパンフ突きつけてやったんだよね。この子は図書館探検部だよってね」

「うんうん、あの時は助かったね。パル、カッコよかったよね」

髪が揺れてのどかから笑顔が溢れ出る。

その一瞬にハルナはどきりとしてしまう。

時折この娘は人をどきりとさせるような表情をする。

そんな顔や表情を見るのがハルナは好きだった。

「んで、そのまま流れで何故か部員になってたしさ」

「えー、そうなんだ」

「で、何？ 何でそんなこと聞くの？」

「えとね、パル、私と一緒にいてつまんなくなかったって思って。私、喋るの苦手だし、一度本読むと没頭して回り見えなくなるし」

何を言ってるんだ、この娘は？

馬鹿なの？

「はい〜？」

「えと、その……」

もじもじするのどか、ハルナは溜息を付いた。

そしてのどかの頭に手のひらをポンっと乗つけてクシャクシャとくする。

「友達だから、別に問題ない。そんでいいじゃん」

「パル……うん、友達、だよね」

「あー、馬鹿言ってるんで手え動かせ」

くるりと振り向いて、ハルナは本を拾い上げる。

くそー、のどかの奴、私に恥ずかしいセリフ言わせたな。

ぐ……お、重い。

両手に抱えた本の重さによるけるハルナ、その肩を抱きとめて、のどかが本を半分取り上げる。

「ふひー、あぶね。サンキュ、のどか」

「一緒に運ぼうね、パル」

機嫌よく鼻歌を歌い始めたのどかが先に歩き出す、その後を本を抱え直したハルナが追いかけた。

主人公設定 『恋町小路(こいまちこみち)』 (前書き)

登場人物設定晒してなかったなので書いて見ました。

主人公設定 『恋町小路（こいまちこみち）』

本編の主人公コミチ。

その正体は未来人です。

未来では魔法界が崩壊して、地球世界も色々とはつちりを受けて大戦争したせいで、人類そのものが死滅を待つのみとなってしまう世界です。

超は魔法を世界にばらしたものの、起きた混乱を収束できずに暴走を許してしまいます（結果、超は死亡？）。

コミチの知る未来では完全なる世界は存在せず、魔法界の崩壊は食い止められませんでした。

そしてネギ達も魔法界と人間界の人間達同士の戦いに巻き込まれて大変な悪党になるとのこと（コミチ談）。

コミチ自身はネギやその従者のことは聞いた限りでしか知りません。

現代へはこの時代に生きていた恋町小路の精神にタイムトリップ憑依する形で転生します。

元の平和世界に生きていた文学少女であった恋町小路は未来のコミチの記憶を見て発狂し、自ら精神の死を選びます（グロいなう…）。

《恋町小路》データ

誕生日：

1988年7月7日

星座：

かに座

年齢：
12才

学年：
中等部1年A組

出席番号：
32番

性別：
女性

血液型：
O型

身体的特徴

身長：
153? > 155?

>は二年進級後の測定により

体重：
常に変動する。平均値は不明。

3SIZE

B：

71 > 73

W：

5 5 > 5 6

H :

7 5 > 7 8

> は二年進級後の測定により

髪の色 :

白灰色。

瞳の色 :

色素の薄い茶色。

肌の色 :

透き通るように真っ白。

内面的特徴

好きなもの :

何か昔は読書が趣味だったかな。

児童文学とかさあ（笑）忘れちゃったよ。

嫌いなもの :

好き嫌いしてたら生き残れないぜ？

性格と行動 :

快楽的で目の前にあることが大事主義。

傍から見て奇行が目立つが、その行動には大した理由もないようだ。友人に対しては理由もなく好意的に振る舞うことも多いが、それを好意と受け取れるかは人次第。

自墮落で社交的な性格でだれにでも馴れ馴れしい。

言動 :

男っばい。

すでに小路であった頃の喋り方などは捨て去っている。

対外関係

所属クラブ・部活：

まだ未所属。

幼馴染：

綾瀬夕映

寮の同室：

長谷川千雨

級友：

宮崎のどか

早乙女ハルナ

戦闘機人の能力

*明らかになっっている能力を書いています。現在の小路のステータスは人間より強い程度です。

腕力：

コンクリートの壁程度は軽く破壊するようです。

俊敏性：

弾丸並に早い？

耐久力：

通常のハンドガンレベルでは貫けない。

特殊能力『マギア・エレベア』：

エヴァの生み出した闇の魔法と呼ばれる呪法。

『掌握』とかするのは不明ですが、戦闘機人に埋め込まれたプロ
グラムらしい。

マナの銃弾を吸収したりしてるので、かなりの使い手であるよう。

主人公設定 『恋町小路(こいまちこみち)』 (後書き)

コミチの設定を書きだしてみました。

いろいろと適当です。

ネギ先生はやくきてー！。

【4】放課後の決闘（前）

いつもどおりの朝だ。

先頭を歩く千雨さんはご機嫌斜め。

一緒に教室に入ると、すぐに挑戦的な視線があたしに向けられてくる。

うぜーなあ、もう。

恋町小路の肉体になってから、元の肉体である少女の運動能力を遥かに超える反射神経とパワーを得るに至ったが、それでも戦闘機人の十分の一程度の強化に過ぎなかった。

動けばオリンピック選手を凌駕する身体能力を有しているのだが、授業や普段の生活でそんなに本気は出してないつもりであるが、一般人レベルからすれば猛獣程度に動く人間はやはり注目されるのだろう。

わくわくといった感じであたしの目の前に立ち塞がるのは古菲クーフエイのやつだった。

千雨さんはそれをスルーして口をへの字に曲げて席に向かう。

「おいバカ町、お前に用だつてさあ」

千雨さんは片手を振り振り無関係でございって感じ。

あたし見捨てられ状態、乙女大シヨック、キャハハハ、柄にもねえー。

「冗談は置いとくか。」

「なんすかクーフエイさん？」

古菲のやつは、めんどくせえからクーな。

そのクーは腕を組んで目をきらきらさせている。
何だよその目は。

「恋町小路、勝負するアルよ！」

「あん？」

指先を小路に突きつけ高らかに宣言する。

やだこの子、戦闘狂バトルマニアかしらん？

がつつくととり損ねるぜ？ クー。

「お前、強いね……。強いやつと勝負して勝つ。それが古家のしき
たりね」

どういつしきたりさ？

「へー」

周囲を見回すと、同じように視線を向けてくる目を感じ取る。

特に好奇心以上の何らかの意図を含めた強い視線だ。

夕映のやつはどうしてんのかな？

あたしはそれは無視して、窓際の方を見れば夕映は席を立ち上が
りかけて、こちらを注視していた。

注目的か、何だ、あたしって有名人ばいわ〜。

そうしてから目の前のクーに視線を投げかける。

出席番号12、古菲。

中国拳法の使い手。

こいつは警戒する必要がない、ただのバカだが、どうやらけしか
けたのがいるな。

そのすぐ後ろの一角にまとまってこちらを見ているのが二人と、座っているが明らかにこちらを見ているのが一人。

出席番号20、長瀬楓。

のっぽの忍者娘だ。

にやにやしやがつてあけすけなんだよ。

性格的にこいつから声をかけてきても不思議じゃないんだが、クーが尖兵つてわけか？

出席番号15、桜咲刹那。

おでこの広いポニーテールの京都神鳴流の剣士。

こいつからはびんぴん感じるぜ、殺気つてやつをさ。

お姫様の護衛役つてか？

こいつは頭脳担当じゃない、どつちかといえば直情バカだ。

間違つても今の時期に接触しても意味のない相手だ。

桜咲のせつちゃんは相手にしないことに決める。

こいつは違うだろうし。

じゃあ誰か？

あたしは一番奥で見物を決め込んでる女を視界の隅に収めていた。
はん。

口の端を歪める。

軽く握った拳を開いては閉めて力を込める。

出席番号18、龍宮真名。

長い黒髪に褐色肌の凄腕スナイパー。

お前か？

桜咲は除外しても、他の二人は連帯しているのは確実だ。

やつの目的は明らかにあたしがターゲットだ。

お前って目をつけたやつにはしつけないんだよな、スナイパーだけに。

こいつはここにいる連中の中では別格の強さだ。

この時期以前から魔法界でもプロとしてやってたらしいしな。

まあ、これも置いておこう。

面倒くさいことはさっさと片付けるに限る。

「放課後、世界樹の裏山広場」

クーの横に並んで本人だけに聴こえるようそう囁く。

「わかったアル！ 楽しみね」

「ちよつと、あなたたち！ 教室で騒ぎはやめてちょうだい。恋町さん、また変なもの持ち込んでたりしないでしょうね！」

クーを押しつけてクラス委員長の雪広あやかがクラスで一番か二番目の問題児の前に立つ。

こいつの通称は委員長な、理由は委員長だからだ。

ちなみに眼鏡はかけてない。

こいつハーフなんだっけか、日本人の癖に完璧な金髪だ。

このクラスの女どもはどういうわけか一般水準以上ばかりで、雪広あやかもまたトップクラスの美少女である。

その美少女が睨みつけてくる。

へへ、そんな目で見ると誘ってるのかって思っちゃうたる？

これまた普通ではない感覚で小路は劣情を催したりするのだった。

「いんちよー、怒るとしわが増えるぜ？」

「毎日お肌の手入れはかかしてませんの」

「いいね、おばさんほどそーいうの気にすんだよね」

「ぐ、あなたねえ……」

口うるさい雪広をさらりかわして席に向かうと、遅刻時間ぎりぎりに神楽坂明日菜と近衛木乃香が教室に駆け込んでくる。

背後で今度は明日菜に説教する雪広の声が聞こえて、二人は取っ組み合いを始めるのだった。

け、平和だねまったく、あと一年は確実に。

くそー、子ども先生がまじでここの教師になるかの確証がもてねえんだが、このクラスには超のやつがいるからな。

その辺は問題ないのかもしれないねえ。

何で子ども先生なんて気にするのかって？

あれがあたしの生命線かも知れねえってことだ。

ぐぐだしてつと世界が終っちゃうからな。

それなりの予防線ははつとかねえとあたしが死んじまう。

「おい、今度は何だ？ 古のやつと何話してたんだ」

千雨たんが座ったあたしに話しかけてくる。

「デート」

「きめーよ」

「気になるの〜？」

流し目で何うと千雨たんはじろりと睨み返してくる。
いけずだな。

机の中に教科書を放り込む。

「ろくでもねーよ。あいつ等と関わるのは止めておけ」

「きひひ、心配してくれてるのね」

「するか、ボケっ！ お前が騒ぎを起こした分、私の日常が壊れん

だよ。こないだも散々だったんだからな」
「あん？」

知らねえな。

なんであたしがなにかすると千雨たんが壊れるの？
わけわかんねえ。

千雨たんは頭抱えて机に突っ伏している。

「……私の平穩……。常識的に……。ありえない……。席まで同じと
か……」

心の平穩をどこかに置き忘れたかのように千雨はぶつぶつと呟いている。

まあ、いつか、これくらい壊れたうちにはいんね。

小路が思い切りあくびをすると担任の高畑が入ってきて、壇上で揉み合う雪広と神楽坂を引き離れた。

そして何ごともなく放課後になった。

裏山

放課後の指定された場所にクーフェイが姿を現すと、決闘の見物人達がクーフェイを出迎えた。

長瀬楓、龍宮真名、桜咲刹那の三人が立会人だった。

四人合わせて一年A組武道四天王と呼ばれている。

クーフェイはそちらには軽く一瞥をただけで、深呼吸をして呼吸を整えると、広場の中央に立って太極拳の動きで演舞を行い始めた。

ほんの身体慣らし程度で、クーフェイが本来得意とするのは八極

拳である。

高揚感を冷ましながらか心は熱く、体をほぐしていく。

前から思ってたアル。

あの女は只者じゃないね！

特に何でもない動きから時折見せる反応速度は常人の域を超えているアルよ。

クーフェイは強い人間が好きだ。

特に同じ土俵で戦える者は故郷でも数少ないと言えた。

それがこの学園に留学してきても同じだったが、どういうわけかこの学年には同等に張り合える存在が複数いたのだから、世の中は広いということを実感していた。

「クー、話してみてどうだったでござる？」

忍者娘の楓が運動を終えたクーフェイに話しかける。

二人が並ぶとかなりの身長さがあるのだが、この二人の実力はほぼ拮抗する。

とはいっても体術面だけでの対決、という面での実力だ。

「やってみないとわからないアル」

「そうか、だが恋町のスタイルが見えないでござるな。あれはあれでいて自然体にも見えるし、擬態なのかもしれないでござるが、正直、隙が見えなかったでござる」

「やつは強いよ！」

「自信満々だな。それより来るかな？」

真名が二人の近くに寄る。

その後ろに無言の刹那が続いた。
刹那の手には剣道で使う竹刀袋が握られていた。

「きつと来るアル」

「その自信はどこから来るんだ？」

そこで刹那が初めて口を開く。

「武道家の勘アルよ。まったく無防備に見えながら一切の隙を感じさせない。これ武道の達人には必須の条件アルよ。これうちの爺ちやんとまったく同じね」

「ずいぶん薄い根拠だが、私も同感だ。恋町は只者ではない」

真名の台詞に刹那が何か言いたげに口を開いたが、思い直したように口をつぐんだ。

「そう思うから刹那もここに来たのだろうか？」

と、真名は刹那を見返した。

「……正直、あの女は好かない。木乃香お嬢様に悪影響を与えかねない。実力を知っておくに後々不都合はないだろうか？」

「そういうことにしておくよ」

「真名はどうして興味を持ったのだ？」

「そつだな、ただの好奇心さ……」

刹那の問いにそう呟きながら、真名は自分の言葉を否定する。

否、と。

真名が恋町小路に対し感じたのは好奇心ではなく、未知なる存在への懸念だった。

何者なのか？

真名なりに調査したが恋町小路の過去はまっさら一般人という経歴以外何もなかった。

半年前に事故に遭い、復学するまでの期間も変わったことといえは外見の著しい変化のみだった。

そこに真名は注目する。

何かがあったのだろう。

だが今の恋町に対して感じるものと、それ以前の恋町の格差がありすぎてはつきりと答えを出せないでいた。

あの女は戦場を知っている。

だがそれはありえないことなのだ。

その不一致する感覚に見切りをつけるべく、真名はクーフェイを恋町にけしかけたのだ。

「来たでござるよ」

楓が広場の出入り口に視線を向けると、他の三人もそれにならって対戦者、恋町小路を出迎えた。

「何故、鳴滝姉妹が一緒でござるか？」

「知らね、ついてきたんだよ」

「そつでござるか」

恋町の両脇には少女二人がいた。

手を繋いでいて、二人はそのまま楓に手を振ったから、小路の腕もブンブン揺れた。

「やっほー楓ちゃん」

「こみつちゃんに道教えてあげてたんだ」
「それはご苦労でござったな」

出席番号22番、鳴滝風香と出席番号23番、鳴滝史伽は目元以外はそっくりなA組の双子だった。

特徴は低等身、小学生にしか見えないことだった。

楓は鳴滝姉妹とは同じさんぽ部である。

さんぽ部は文字どおり散歩を主体とした部活動で、麻帆良学園にある珍妙な部活動の中では極めてまっとうな部類に入る。

麻帆良学園の魔境と呼ばれる場所さえも散歩の通り道にしてしま
うのだが……。

それは別のお話だ。

「待たせたか？」

「いや……」

楓は背後の広場の中央に立つクーフェイに視線を投げかける。

「ちようどいいところでござった」

「ふっん？」

鳴滝姉妹の手を解いて背伸びをした小路が広場に踏み込んで、楓の両隣に姉妹が並んだ。

「じゃ、始めようぜ、クー」

「準備運動はいらぬアルか？」

「フッ」。

風が音を切つて、小路が立っていた場所に円形状に埃が舞う。

次の瞬間にはクーフェイの正面から掌底を繰り出し、あごを突き上げる一撃が繰り出されていた。

それを払い、クーフェイは肘鉄を見舞うがすでに間合いにはいなく、そのままは間合いを詰め、斜向かいにすり抜けると、掌打を小路の胸元に突き放っていた。

小路は大地を蹴って後方に飛びそれをかわすと、両手を地面について体を回転させると強烈な回転蹴りがクーフェイの頭上を襲う。

両腕をクロスさせてそれをガードして、体を丸めてそのまま地面をころころと転がって、クーは距離をとって起き上がっていた。

見物人の群れから、おーっという歓声が上がった。

突然始まった息も尽かさぬ攻防に鳴滝姉妹が手を打っていた。實力は伯仲、いや、わずかにクーフェイが押されていたか？

楓は細めた目を対峙する二人に向けて両者の実力差を測ろうとしていた。

「少し無駄が多い」

「うん、大雑把だな。だがあれでクーの動きについていってる。これはわからない」

無駄が多いと評したのは刹那、答えたのは真名だった。

「スタミナが切れるのは恋町の方が早いだろう？ 動きは雑多、無駄のない動きをするクーの方が消耗は少ない」

「だがその分動きが読みやすい点があるな。中国拳法は理にかなった考え抜かれた拳法だ。欠点ではないが、もし恋町とクーのどちらかを相手にするなら、刹那、君はどっちに苦戦すると思う？」

「それは……」

答えるのが難しい質問だ。

京都神鳴流は人間を相手にすることを前提とした剣術ではない。魔を討つ剣であることから、俗世的な人間の争いに剣を用いることをよしとしない流派であった。

刹那はそのように教育を受けてきた。

だから真名の問いに対して言葉を濁して答えていた。

真名は広場を見回す。

この場には見物人は五名、A組関係者以外の余所者は入り込めないようにあまり強くない人払いの結界を敷いていた。

真名の張ったセンサーに二つの反応を感じて苦笑する。

どうやら気になって仕方がない好奇心の強いねずみがいるようだった。

「どこへ行くんだ、真名」

「ねずみを捕まえに」

そう言って背を向ける真名に刹那は不審の目を向ける。

その様子に他の三人は気がつかず、鳴滝姉妹が決闘を再開した二人に応援の声を上げていた。

「なあ、クーさんよ」

「なにアルか、恋町、勝負中ネ」

お互いの距離は至近、踏み込み打ち出せば必殺の一撃を繰り出せる距離だが、小路が切り出し、クーフェイは警戒を怠らずに構えた

まま答えていた。

見物人からは二人の距離は遠い、何を話しているのか誰にもわからない。

遠めには二人が対峙しあつたまま硬直状態に陥つたように見えた。

「賭けないか？」

「ん？ 何？」

クーフエイは首を傾げる。

「いやさ、この勝負、勝つた方が負けた方にある条件を飲ませるつてのはどうよ？ そうだな、クーが勝てば、あたしを一日自由にしたい権利をやるよ」

「そう簡単に自分の人生投げる発言していいアルか？」

そう答えたクーフエイからは呆れた様子が伝わってきて、小路はニヤニヤ笑ってみせる。

「自分の人生だからこそ自由にする権利がある」

「ふむ……。じゃ、私が負けたら、恋町はナニを要求するアル？」

「賭けするか決めたら教えたい」

「ふうん……。賞品はお互いの一日の自由の権利アルか？ いつでも要求できる？」

「もち」

「その賭け、受ける！」

「はっ！ あんたいい女だな」

「当然アルよ！」

二人が同時に動いた。

交差する拳、俊速の突きの後に目まぐるしく立ち位置を変えなが

ら、舞闘を踊るかのように入れ替わっては攻防を繰り返す。

速さと正確さ、技量と力はほぼ拮抗しているように見えた。

この場における実力者の楓と刹那も二人の動きから眼を見放せず、真名の不在も忘れて見入っていた。

【5】放課後の決闘（後）

何故このようなことをしているのだろうか？

綾瀬夕映は自らにそんな疑問符を投げかける。

かといって自らの行動が何を意味するのかわからないわけでもない。

大量に買い込んでしまった不思議系ドリンクを両手に抱えたまま人の後を尾行しているとか、傍目に見ればシュールな光景も気に留めている余裕はあまりない。

標的は常に動いているのだから。

普通ならありえないことをしていると自分でも自覚しているところだ。

非常識的行動だ。

そう非常識、そして尾行する相手も非常識の塊である一人の少女であった。

人の後を尾行するなんてどうかしている。

それも相手は幼馴染、友情を大切にすればしてはいけない行為だ。

なのだが、夕映はどうしても気になって止めることができなかつた。

その相手とは、即ち 恋町小路の後を尾行していたのである。

相手がどこに行くのかはわかっていた。

漏れ聞いた話ではクーフェイという中国からの留学生となにやら勝負をするという話だった。

これが他人だったり、同じクラスメイトでも構うことなく放置す

るのが普通だったが、夕映は心が沸き立つような気持ちを抑えられそうになかった。

乱暴なことをするのではないか。

怪我をしたらどうするのだ。

あの中国からの留学生は中国拳法の使い手で、大学生の有段者さえも歯が立たないともっぱらの評判だったのだ。

現に痴漢の現行犯をクーフェイが叩きのめすところを見たことがある夕映としては、そんな脳味噌筋肉女になど関わりたくないのが本音だ。

そんな凶悪な相手と幼馴染である恋町小路が　今は距離を置いてしまっているが、そんな相手に関わって大丈夫なのか？　という疑念と心配が交錯して気が気で入られなかったのだ。

昔から小路は　運動神経は人並みより下で、どこかぼうつとしてて、本を読む以外では頼りがないところがある少女だった。

今では正反対の別人のような人格で、少しの、いや、かなりの外見の変化はあったものの、夕映の中にある、恋町小路という少女の絵姿は事故前と少しも変わっていなかった。

小路が中国娘とやりあつたらただじゃ済まないのです。

病み上がりなのに無茶ばかりして、また大怪我でもしたら本当に大変なのです。

ちよつとばかり積極的にしてるからって、絶対敵いつこないってわかりそうなものです。

これも機会ですから、一度こてんぱんにやっつけられれば眼を覚ますかもしれないのです。

元通りの私を知る、大人しくて儂い、童話が誰よりも好きな女の子に……。

ふと我に返って夕映は自己嫌悪に陥る。

ほんのわずかでも友達が痛い目に遭えばいいなどと考えた。
それも利己的な自分のための思考だった。
恥ずべき思考。

決闘なんてことは止めて一緒に帰ろう。

ただそれだけを言えば済むことではないのか？

そうだ、私は小路と話がしたかったんだ。

病院で目を覚まさない小路に話しかけるのが辛くて、辛くて夕映は逃げ出した。

すべてから目を背けて、本の世界に逃げ込んだのだ。

それが今までの私

だから、今ほんの少しだけ勇気を振り絞れば、この距離は近づくのではないか。

だがその勇気はわずかな逡巡の間に打ち砕かれていた。

前を歩いていた小路が何故か鳴滝姉妹に両手を引っ張られて、裏山に続く階段を登っていったからだ。

夕映は落ちそうになったドリンクを抱えなおしてその後を追った。
もう一人、後を尾行する人物に気がつかないまま。

世界樹公園

裏山広場は世界樹のお膝元にある緑にあふれた公園の一部だ。

もっとも世界樹を観ようと訪れた観光客や学園生徒等の大半はお目当ての大樹に群がり、この広場自体が利用されることはあまりないのだが、それでも常に人の往来には事欠かないはずだった。

だが今は不思議なほど人気が少なかった。

何で私は隠れてこそこそしてるのでしょうか？

茂みに身を潜めた夕映は中央広場で対峙する二人の姿に夕映は釘付けになっていた。

何故か他のクラスのメンバーまで野次馬にいるのかわからないが、それもあって夕映は表に出て行きにくかった。

面白くない。

まるで大道芸のピエロのようにさらし者ではないか。

クーフェイのことはどうでもいい、戦いをけしかけた本人だ。

だがそこに小路がいるのが気に食わないのだ。

本当に決闘なんてするつもりなのですか。

相手は拳法の達人の中国娘、小路が敵うはずがないのです。

止めなければ　　そう思いながら夕映はここから動けなかった。

本当に私の知っている小路ならば、絶対に勝てっこないし、そもそも争いなんてしようとしなはずで、小学生時代の二人の運動神経はどっこいどっこいだった。

いったい自分は何しにここまで来てしまったのか、あのとき声をかけておくのだったと遅い後悔をし始めていたところだ。

落ち着け、落ち着け……、と夕映は不思議ドリンクにストローを刺して飲み込んでいた。

抹茶ブルーハワイ。

さすが謎ドリンク、ネーミングもストレートながら味を予想しにくい一品である。

「あの綾瀬さん？」

「ブツ！」

背後から声をかけられて、思わずむせた夕映の背中を何者かの手がさする。

「大丈夫ですか」

「大丈夫じゃっ、宮崎のどか……」

夕映が目の前にいる人物の名を呟くと、当の本人はにっこりと笑って見せた。

傍に一緒にかがみ込んで、何故かその頭に葉っぱを乗せている。シールだがそれを指摘する余裕は夕映にはなかった。いつからそこにいたのか、まったく気がつかなかったのだ。

「な、何して……」

「あ、決闘始まったみたいですよ」

のどかの言葉に夕映が振り向くと、一瞬、小路の姿が消えて、対戦者であるクーフェイに肉薄すると、瞬時の攻防の後に両者は距離をとっていた。

観客から声が漏れて、静かな広場にわずかばかりの喧騒をもたらしていた。

何がなんだかわからない。

それが夕映の正直な感想だった。

隣ではのどかがすごい、すごいね恋町さん、とはしゃいでいる。あれが人間の動きなのだろうか？

何が何であんな動きができるのか？

目の前で繰り広げられたものをまだ信じきれないまま、夕映は沈黙に沈み込んでいた。

思考はまとまりそうにない。

夕映は圧倒されて言葉が出ないまま、不思議ドリンクの半ば空になったパックを握り締めていた。

手の中で紙パックが潰れて、ぽたぽたと謎色の液体が地面に染み込んでいく。

正直足が痺れてきて屈んでるのも辛いのだが、それをのどかに悟られるのが嫌で、夕映は頑張って座っていた。

「やあねずみさん達、こそこそと覗き見かい？」

「ひゃうっ!」

「ふえ!？」

知った声が誰何して、二人は驚いて同時に立ち上がっていた。痺れる足にもつれて伸ばした夕映の手は安定を求めて宙をさまよひ、それを思わず掴んでいた。

「え? キャーっ!」

掴んだのは宮崎のどかの制服だった。

そのまま巻き込むように茂みの中に押し倒して、二人は派手に倒れこんでいた。

茂みの枝葉の中に突っ込んで、みしみし音を立てながら、宙ぶらりんになった夕映とのどかだった。

「お、重い……」

「ふぎゆう……」

下敷きになった形の夕映が手足をバタバタさせてもがくが、宙ぶらりんな上へのどかが重くて身動きが取れなかった。

そののどかは目を回しているようで反応がいまいちにぶかった。

「助けがいるかい？」

見かねて声をかけたのは二人を驚かせた本人である龍宮真名だった。

苦笑を浮かべて両腕を組んでいるのが憎たらしく思えたが、とりもなおさず夕映は助けを求めることにした。

このままではのどかに押し潰されてしまいそうだ。

「助けて……。です」

「OK。起きろ宮崎、すぐ起こす」

真名がのどかを抱き起こすとようやく重みが離れて一息つく。

はぁ……。死ぬかと思っただですよ。

夕映は楽になって新鮮な空気を肺に送り込む。

濃い緑樹の匂いまでが胸の奥に行き渡ったようだった。

「立てるか？」

「大丈夫です」

そう答えて、何とか身体を起こし、枝葉を鳴らしながら夕映は地面に降り立つ。

のどかはようやく意識がはっきりしたのか、真名に礼を述べて離れる。

ふと視線が合って、のどかが罰の悪い顔をしながら見つかった。つたね、という顔で夕映に視線を投げかけた。

その視線を受け流すように、夕映はお尻や胸元についた葉っぱと汚れを叩き落とす。

「さて、あっちも勝負はついたみたいだし、かくれんぼはお終いにしよう」

「はーん」

真名が視線を広場に投げかけてそう告げると、暢気にのどかが手を上げて賛成の意を表す。

夕映も不承不承にこくりと肯いてみせると、真名は行こうかと二人を促して、三人は揃って広場の方へと足を踏み入れていた。

「よー、ユエキチ、来てたのかよ」

夕映達が人騒動起こしている間に決着はついていたのか、大の字になって横たわるク・フェイを助け起こしながら、小路が片手を上げて三人に挨拶をする。

そのク・フェイの額には掌底の手の平の後がくつきり赤くついている。

痣にはなっていないようだった。

「負けたアル……」

悔しそうに呟くク・フェイに小路はニヤニヤと笑いながら、両腕をク・フェイの正面から回し耳元に囁いた。

「次の日曜日、デートしようぜ。おめかしして来るんだぜえ？」

「へ？ なっ……。ん、んんん！！」

熱い吐息がク・フェイの鼻先をくすぐって、次の瞬間、唇を唇が塞いで歯を赤い舌が割って侵入していた。

唾液の粘膜が音を立てて、ペチャリクチャリとどこか背徳的な音を立てる。

ク・フェイはまったく動けない。

あまりのことに脳がついていけずショートしてしまった。
それをいいことに小路がクーフェイの頭を固定して、その唇をひたすらエロく貪るのだった。

「「キャッー！」」

鳴滝双子が抱き合って同時に叫ぶ。

実に刺激的な百合な光景だった。

楓と刹那は啞然とそれを目撃していた。

あの女、絶対にお嬢様には近寄らせん、と竹刀袋を握り締めて、殺気を込めた目で小路を睨みながら刹那が呟く。

「な、何するアルかーっ！！」

ディープに舌を絡めていたのは一瞬のことで、すぐに身を離すと、クーフェイの鉄拳が即座に放たれるが、小路はそれをひらりとよけてみせる。

そして舌をぺろりと広場向こうからやってきた三人に出して笑った。

歩いていた三人、真名はやれやれという顔をし、のどかは顔に両手を当てながらもしっかりと目撃し、夕映は口を開けたまま固まっってしまった。

「クーフェイ」

「な、あ、あ、あにアルか！」

口と胸元を押さえしやがみ込んだクーフェイが警戒心露に答える。
心なしか目元には涙が浮かんでいるようだった。

ファーストキスをディープという形で奪われた被害者の少女の声が震えている。

警戒してもいただくものはいたただいたんだがあ？
小路は悪い笑みを口元に貼り付ける。

「あたしが勝ったんだ。約束、忘れんなよ？」
「あ、あうっ」

指差すとクーフェイが情けない声を上げる。
今更ながらに約束を思い出したのだ。
まるで悪い罫にでもかかったような気持ちでクーフェイは涙目である。

「おい、恋町、クーフェイにどんな条件を出したんだ」

真名が問いかける。

「あたしの女になれって言った」
「ぶっ」

思わず吐き出したのは夕映だった。

「な、な、な」
「何だよ夕映？ お、いいもん持ってんじやん」

と、夕映が抱えた不思議ドリンクを一つ摘み上げ、小路はストロ―を飲み口に刺して飲みだす。

抹茶フレーバーストロベリーである。
抹茶味は夕映が好きで、ストロベリーは小路が好きな味である。

「こ、小路い？」

「ん？」

「お、女の子にいきなりあんなことしちゃ駄目ですよ！」

「えー？ いいじゃん、したかったんだし」

「したくてもしちや駄目です！ 同意も得てない子にいきなりなんて色情魔もいいところです。小路、そこに座るです！」

「へい、へーい」

頭の後ろに手を回して、小路は鞆を地面に敷いてそこに正座する。目の前には仁王立ちする夕映。

持っていたドリンクをのどかにまとめて渡し、みんなに配っていますよ、と言い置いて小路に振り向いた。

それから小一時間、夕映の説教が続くのだが、夕暮れ時、日も落ち始めて、他のメンバーは付き合いきれず、連れ立って帰途に着くのであった。

満足げな楓。

一人暗黒モードの刹那。

双子の手を引いた真名。

のどかもお先に失礼しますと、後に残った二人にペコリと頭を下げて、みんなを追いかけて階段を下って消えていった。

帰路

「何だよ、ユエキチ、まだ怒ってるのか？」

「……」

ユエキチ、と二人の間では馴染んだ小路の言葉も前を歩く夕映には不発だった。

すでに説教もあらゆる語彙が尽きてお開きとなり、寮の門限もあるから帰宅しようとして、すっかり暗くなつた道を二人して歩いていった。向かう先は同じ女子寮だ。

一緒に帰るのは不自然ではなく、二人はクラスメイトで幼馴染だ。近くにおいて当然の関係でありながら今の二人の距離は近くて遠い。無言の夕映にため息をついて見せて、小路は口笛を吹きながら続く。

湖の方から吹く風が二人の間を駆け抜けていく。

何だ？ 何、不機嫌なんだ。

クーにちよつとイタしたからつてあんなに怒ることないじゃないか。

めんどくせえなあ。

寮が見えてきて、門の手前で夕映が足を止めて、小路も合わせて止まった。

「どつして……」

「ん？」

小さく夕映から吐き出された言葉。

その背を街灯が照らし出す。

夕映が頭を振つて言いかけた言葉を追い出すと、ポツリ、と一言だけ言葉を発した。

「小路は、小路……ですよね？」

「何言ってるんだい？ あたしはあたしだよ？」

「本当です？」

「ユエキチはどう思ってるんだよ？」

「わからない……です。小路が私の知ってる小路じゃないんじゃない

かって。事故の後…小路が変わっちゃって……、お爺ちゃんが死んじゃって……。お見舞いにも行けなくなって。どうしたら前みたいに戻るのかそれだけを考えてたです」

そう言って夕映が小路に振り向く。

その表情は不安に満ち、感情に押しつぶされそうになっている。

目と目が合った。

ごくわずかな瞬間、虫の声だけが二人の間に音を残す。

その刹那の時間も小路には妙に長く感じられた。

「違ったらどうする？ あたしが恋町小路の仮面をかぶった別人だったらどうよ？」

「そんなこと、ありえないです。小路はやっぱり小路なんじゃないかって思ってます。どんなに変わっても」

「ありえない、か……」

夕映の知っている恋町小路を殺したのはコミチである。

中学入学を控えた、明日を希望を持って生きる一人の少女。

本が好きで、童話の絵本を自作までする小路が目指すのは作家になることだった。

だがその未来は絶たれたのだ。

他ならぬ未来から来たコミチ自身の手によってだ。

生きるか死ぬか、完全な融合でなければどちらの精神をも殺してしまう選択肢のない道。

適わなければ両者は破滅し、肉体も死を迎える時空間跳躍。

転移し交わった精神と心。

その中でこの世界の小路はコミチの記憶によって心を壊されて精神が崩壊した。

いや自壊を選んだのだ。

今の小路の肉体はコミチが乗ったものと言って間違いではな

い。

未来からの転生、タイムマシン。

SF小説にあるような都合のよいものではない。

過去に逆行することによる、世界への影響を最小限に抑えた、未来の博士が作り上げたモノ。

夕映に真実を伝えることに何の意味もない。

そして真実など小路にとってどうでもいいことだ。

消えた人格に対して罪悪感も良心も痛みはしない。

何故ならば、今ここにいるのがコミチであり小路自身であるからだ。

どちらにしろ小路は殺人者であり、多くの命を奪ってきた戦闘機人である。

悔いたところで、許しを請うたところでなんになるのだろう。

未来の知識などこの世界では何の役にも立たない。

歴史は常に一定の力により左右される。

その大きな力の一つにでもならない限り、歴史を変えることは不可能だった。

唯一その可能性があるとするれば、それは少し未来に訪れる人間を利用するしかない。

未来で起こる悲劇はまた彼女を殺し、小路を殺すかもしれない。

「小路？」

夕映の手を小路の白い手が握っていた。

不思議そうに夕映が小路の顔を見つめる。

「なあ、何があっても、夕映は――」

薄い色素の瞳が夕映を見つめていた。
夕映も引きつけられたように小路をじっと見つめ返していた。
力強いその手

「あたしを信じてくれるのかい？」

「もちろんですよ」

小路の手を握り締めながら夕映は笑って見せた。
そうするのはすごく久しぶりのことだった。

【6】ドキドキ!? クーフェイの初デート(前)

日曜の朝

休日の日曜日ともなれば世界樹広場はカップル達が待ち合わせる恋の巡礼地メッカとなる。

男と女の恋の駆け引き。

待ち合わせに早く行くか遅れて行くか？

それさえも恋人同士からすれば甘い恋のスパイスとなる。

そんな甘さとは程遠いはずの一人の少女がなれないスカートを弄りながら、屋台のクレープをものほしそうに眺めていたりするのだ。誰であろうクーフェイである。

その姿は普段のクーフェイを知る者からすれば、天地がひっくり返るような衝撃を与えることは確実であった。

中華娘はどちらかというところ恋より食い気、ひたすら体を動かすことが好きな脳筋少女だった。

足元でヒラヒラ揺れるスカートはフリル付きで、白く上品さをかもし出し、ピンク色のカーディガンは乙女色を前面に引き出していた。

目立たない程度にアイラインも引かれ、ほんのり薄化粧。

髪留めも外され、三つ網に結われ、白いリボンが踊っている。

まさに純然たる古式に則ったスタンダード形式なお嬢様スタイルというやつである。

コーディネイトしたのは1年A組のクラスメイトである雪広あやかだった。

そわそわと不慣れな服装のスカートを摘んでは離し、その違和感に少し戸惑いながらもクーフエイは腕を組んで、今日のデート相手を待ち構えていた。

「早く来るね、恋町」

とはいっても当然の本人は拳を握り締めて左手に打ち付け、格好に似合わせぬ闘気を発散させていた。

「あれでは決闘する気満々のように見えるでござるな」

「決闘みたいなものだろう。クーはデートしたことがないからな」

カフェの片隅の野外のテーブルを龍宮真名と長瀬楓が占拠して、クーフエイの艶姿を遠くから見物していた。

数人のやはり待ち人達が朝の珈琲を楽しんでいたりする。

「それにしても委員長が乗るとは思わなかったでござるな」

「ああいうのは得意だろうと思つて声をかけたのさ。何せお嬢様だし」

委員長というのは他ならぬ雪広あやかのことである。

クーフエイがデートするので服を見繕つて欲しいと頼んだのだが、あやかが乗りに乗って全身コーディネートすることになった。

雪広のお屋敷のお針子を呼んで、サイズまで変更しての気合の入れようだった。

面白いのでクーフエイの改造資金は真名が捻出したのだが、思いのほかクーフエイが抵抗し、そこは楓がねじ伏せたわけである。

一悶着があつたわけだが、それは割愛しておこう。

「ところで真名はデートしたことあるでござるか？」

「さあな、そう言う楓はどうなんだい？」

楓の質問を質問で返し、さらりとかわす真名。

余裕を見せる真名の貫禄に、むむむ、と唸った楓はそれ以上の追
求はせず広場の入り口に視線を投げた。

やぶ蛇は突っつかないのが賢い忍者である。

そして時間を確認する。

「遅いでござるな、恋町……」

「今、下にいるよ」

「どづいう目をしてるでござるか？」

苦笑し楓は広場下に向けて目を細める。

眼下の階段下は休日も相まって私服姿の通行人が多く、特定の人
物を見分けるのは容易ではない。

その中からいち早く見つけ出すのだ。

楓も相当目がいい方だが、真名の目はどうなっているのか、スナ
イパーという人種と戦うときは注意でござる。

そのときが来ないことを祈るばかりだ、と楓は思考する。

「来た」

すでに楓も小路の姿を捉えていた。

なかなかのお洒落っぷりで、楓はおかしさに笑った。

「クー、聞こえるでござるか？」

『クー、聞こえるでござるか？』
「じゃ」

耳元を押さえてクーフェイは背筋を引き伸ばす。
雑音が混じるがマイクは機能していた。
真名がサポートにと楓に渡してクーフェイにつけさせたものだ。

「聞こえるアル」

クーフェイは首のチョーカーに仕込んだマイクを指先で弄りながら返事を返す。

雑音が聞こえる。

『恋町が下に来ている』

「そ、そうアルか」

クーフェイは肩を抱いてブルルと身を振るわせる。
武者震い、というわけではない。
先日の決闘の後にうかつにも唇を奪われた拳句、ディープキスマでされてしまったのだ。

その上のデートである。

本当はチャイナドレスで済ますつもりでいたが、悪乗りした連中にこんな格好をさせられていた。

こんな格好では襲われたら逃げ憎くて仕方がない、ないのだが…。

ヒラヒラの服を着て化粧までさせられ、鏡に映った自分はまるでお姫様である。

しばらく見惚れてしまったが、こんな自分ではない。

でも取っ払うのは勿体無いから今日一日は我慢することにしたのだ。

それにクーフェイも女だ。

可愛い格好をした自分を見て貰うのも悪くない。

誰に……？

ちょっと凜々しい恋町小路の顔が思い浮かんで頬に両手を当てていた。

少し火照って熱く感じた。

お、落ち着くアルよ。

ファーストキスだったけど、相手は女でノーカウント。

ノーカウントであるに違いない…のだが、土壇場になって高鳴る胸に動揺を隠し切れない。

深呼吸、深呼吸アル。

動悸よ静まれ！

『おい、クー？』

「すっ…はあ…」

息を吸い込んで胸を張り、吐き出そうとした次の瞬間、クーフェイは意味不明の叫びを漏らしていた。

何者かに背後から抱きつかれ、耳元に熱い息を吹きかけられていた。

普段のクーフェイであればその接近に気がつかずにいることはなかっただろう。

だが反応は致命的に遅れていた。

「よお、子猫ちゃん。可愛い格好じゃないか。似合ってるぜ」

「はあううう」

そうクーフェイに囁いたのは陽の光に白い髪を銀色に輝かせ、赤いリボンで結んで背中に髪を流した凜とした美少年だった。

否、囁いたのは少女でその中身は恋町小路だった。

燕尾服を思わせるシャツとズボンだったが、それを少し着崩して着ているのだが、不思議とそれが似合って見える。

にやりと笑い、打ち払うクーフェイの突きを片手で受け止める。

顔を真っ赤にしたクーフェイは顔を伏せ、小路の顔をまともに見れないでいた。

わ、私、どうしたアル!?

「さあ、行こうぜ。デートのエスコートはあたしがするからな」

改めて腰を折り、片手を差し出す小路。

おずおずとクーフェイが手を差し出し、その手を小路が握ると引っ張って、がちがちなクーフェイをエスコートする。

小路の動きには躊躇いがなく、思わずその動きにクーフェイは乗せられていた。

広場から二人は立ち去り、その足は路面バス乗り場に向かう。

「まったく動揺しすぎだ。近くに寄ったのも気がつかないとは、耐性がないのも困りものだな」

「クー、落ち着くでござるよ」

呆れる真名、サポートしようと思いが呼びかけるがすでに接触している、向こうからの会話を拾うのに専念することにする。

「動き出した追っ手ぞ」

「そうしょっ」

口元に笑みを浮かべた真名が立ち上がる。

真名の視線は二人が広場を出て行く後姿を追っていた。

そして呟く。

「私を飽きさせないクラスメイトというのもなかなか貴重だな」

「何か言ったでござるか？」

「いや別に」

そして二人は休日の街中に姿を消したカップルを追うのだった。

長谷川千雨

長谷川千雨の朝はいつも遅い。

特に休日ともなればなおさらで、夜遅くまでパソコンに向かい自身のホームページの作成に余念がない。

初めは雑談目的だったのだが、次第に自分の写真などを加工して載せることに愉しみを見出すようになっていた。

更新の度にぐんぐん伸びるアクセス、コスプレ衣装は密かに実家で仕立て、メイクアップを施した千雨はまさに別人。

最近ではCG加工に磨きもかかり、一日一〇〇〇〇アクセスを突破していた。

目指せネットアイドル、チウたん！

私のリアル、ここにあり！

そう、こんな異常な麻帆良よりもネットの世界がどれだけ私にと

って常識の世界であることが、麻帆良学園という明らかな異常存在をネット世界の向こうの連中に少しずつリークするのが目的でもあった。

単純に麻帆良であったことを少し脚色して流していたりするのだが、今のところあまり効果はみられない。

仕方のないことではあるが、この世界の異常さを世間の人間はなかなか信じられないのだろう、と千雨は思っていた。

でもその内知らしめてやるつもりでいた。

くくく、待ってるよ、私はこれで真実を暴いてやるんだから。

私の中の妄想だけだ。

最後のエンターキーを押して今日の更新を終える。

最近の愚痴は同室のバカ女のことか、ネットでは散々に扱き下ろしてやっていた。

さすがに実名とか、身元がばれるようなことをしてはいないが、いつの間にかできたチウファンが千雨の味方であった。

「ふう、あー疲れた。コンビ二いこ……」

立ち上がり、ジャージ姿では何なので脱ぎ捨てると、カットシャツにスカートとジージャンを羽織り、普段着に着替える。

隣のベッドを一瞥し、もう一人の部屋主不在を確認する。

何だか知らないが、あの女にはお洒落着を用意していたのだが、今日デートなのだと言う。

デートとか、ありえねえ…どうしたらこの女に寄る男がいるのだ。

「つーか相手は女で拳法女らしい。」

そういう趣味か、拳法女はレス娘なのかよ、という突っ込みは置いておいて、私は奴のだらしなさが気に喰わない。

やるなら徹底的にやりな！

目指すわ男装の麗人だろ、常識的に。

というわけで、恋町のボサ頭をブラッシングし、着こなしをレクチャーし、丁寧へアケアを施した後にリボンをきれいに結んで出来上がりである。

正直、弄ればそこそこだと思っていたのだが、実に弄りがいる素材だった。

鏡に映った恋町は中世的な美男子といった風情で、まさに王子様のようにあつた。

この私が一瞬でも見惚れたなんて絶対に内緒なんだが

鏡に映った自分を千雨は眺める。

眼鏡をかけた、どこにでもいる普通の中学一年生の少女が映っていた。

容姿は並だが化粧の乗りは最高によく、コスプレすれば別人になりきることができる。

ネットでは人気急上昇、でも現実の今はごく平凡な生活を送る少女に過ぎない。

別にこつちの世界で主役になりたいわけじゃない。

着飾って化粧してきれいになった自分をアピールしていい気持ちになれるのはネットの中だけでいいのだ。

男が欲しいとか、恋人とかそういうものに興味があるわけじゃないし、むしろいらぬし不要なものだった。

それにそんなことができるのも今のうちだけだろう。

千雨は鏡の曇りを指先でなぞって拭う。

キューッとガラス面が音を立てる。

まあしかしなんだ　王子様になれるようなのが身近にいるのは
正直心が躍る。

中身は最悪だが、男を相手にするよりはマシだ。

現実の男は決して王子様になんかなりはしないのだ。

ヘアを整え、メイクを施し、衣装を身に着けた恋町は凜々しかった。

内心、ドキドキしながらも、いつもより素っ気無くしていた。

時間に遅れるという恋町を部屋から追い出して、何となく悶々としながらパソコンの前でキーボードを叩いていたのである。

いつものようにネットで愚痴る気にもなれず、気分はどこか惚けていた。

そのとき、ピンポン、というチャイムの音が鳴り響き、意識を現実に引き戻されていた。

来訪者かといぶかしんで、戸を開けると目の前に綾瀬夕映がいた。

「何、何か用かい？ 私、でかんだけど」

「あの、こ、小路いるですか！」

勢い込んで言う綾瀬を見ると、外出着だろうか、赤いチュニック柄のワンピースに小さなリボンで飾り付けられたバケットを携えている。

ピクニックでも行くのだろうか？

格好から千雨はそう思考して、部屋に上げるつもりはないから、そのまま戸の外に自分の体を押し出していた。

引っ掛けたスニーカーをしゃがんで履きなおして綾瀬の問いに答える。

「いない」

「あ…：そうですか」

しよげる綾瀬、大方誘いにでも来たのだろうか、当人の恋町は拳法娘とデートの真っ最中である。

いや待てよ？ こいつらいつの間にかこんなに近くなった？
そもそも綾瀬はずいぶんと距離をとっていたはずなのだが……。
振り返って私は綾瀬をじっと見る。

「な、何です？」

戸惑う綾瀬の声、なるほど、この子も磨けば光りそうだとレイ
ヤー視線で綾瀬を散々弄った後、千雨は普通に事実を告げる。

「恋町ならデートだよ」

「へ？」

「聞こえなかったか？ デートだってさ。今日は帰ってくるかわか
んねえな」

これは嘘だ。

恋町はデートが終わったら普通に帰ってくる。

ちゃんぽらんに見えるが、完全な規則破りをするのではない。

とは言っても常にぎりぎりのグレーゾーンを掻い潜るぐらいのこ
とをするのだが、本人はそれを楽しんでいるようで、千雨はそうい
う部分に触れることはすっかり諦めていた。

「んで、そういうわけで、私はコンビに行くんだよ。腹減っててさ」

ガシッ、と私の肩を綾瀬の手が掴んでいた。

おいしい？

「ちよつと待つですよ！」

「あん？」

何だよ綾瀬、うざいぞ。

お前そんなキャラだっけか？

元のキャラなんて知りもしないのだが、本ばかり読んでいる大人しそうなイメージである。

そいや宮崎も似た印象だ…似たもの同士え。

「ちよつと詳しく教えるです。あ、お腹減ってるならこれを差し上げるです」

綾瀬が示すのはバケツで、パカリと開けると、中にサンドイッチの群れが見えた。

千雨の咽喉が鳴る。

手持ちの金がありません、常時金欠状態の貧乏学生である千雨にとって、食べ物確保が命綱であった。

何せ今月はレイヤー費用で資金が飛んでしまったのだ。

お金はいくらあっても足りない。

であるから、ただで食べられるご飯は最優先すべき事項の一つであった。

その性のせいで余計なことに関わったりすることもあるのだが、今がその瞬間であることに千雨は気がついていなかった。

「本当？」

「本当です。洗いざらいしっかり全部話すですよ、長谷川さん」

千雨の両肩を掴んだ夕映が真剣な眼差しで告げて、ゆさゆさと千雨の肩を揺さぶった。

おい止める腹に響く……。

そして今日の恋町のデート相手の名前と待ち合わせ場所を綾瀬に告げると、彼女はパツと手を離すと頭を下げ礼を言い、いきなり走り始める。

「ちよつ、ご飯、まてええ……」

慌てて立ち上がり、千雨は追いかけてよとすが、腹の音が派手に鳴って屈み込む。

くそ、逃げ切れると思うなよ綾瀬。

ただ飯が逃げた。

ふらりと立ち上がって眼鏡が鈍く光る。

腹に力を入れて、気合を入れて千雨は走り出していた。

クソ、食い物ごときで私らしくねーぜ。

走りながら冷静にそう考える自分がいるのだが、食い物の恨みは恐ろしいんだぞ、と綾瀬に恨みを転化させて空腹を紛らわせるのだった。

そして千雨のあまり平和でない一日が始まるのだった。

【7】ドキドキ!? クーフェイの初デート（後）

今年流行の服が立ち並ぶウィンドウ、ショッピングモール。

休日の街路は人が行きかい、欧州を思わせる街並に日本の風景も入り混じって麻帆良独特の景観を生み出している。

色とりどりの風景を窓から眺め、それらはあっという間に別の景色へと置き換わる。

路面電車の乗り場。

お姫様よろしく可憐な少女の手をとって王子様が降り立つと、周囲の人々の視線がそのカップルへと注がれていた。

小路とクーフェイの二人組みだった。

二人が降りたのはセントラル中央駅。

麻帆良のどこにでもアクセスできる広場で、麻帆良各地の路面電車が終結する場所でもある。

路面電車一つとっても個性溢れる車両となっていて、麻帆良は路面電車の聖地でもあった。

カメラを構える少年達が新たに入ってくる路面電車に群がって、一緒に写真を撮っている光景もまた風物詩の一つだ。

その横を手を繋いだ二人がすり抜ける。

恥ずかしいアル。

顔を真っ赤に染めたクーフェイは俯いて、小路に手を引かれるままについていく。

大人しくがさつに見えないように気を使って、降りる様を誰かに見られたらどうしよう、いや、自分は変ではないだろうか、とそんなことばかりを考えていたのだ。

服装で羞恥心を覚えるなど初めてのことだった。

いや、その程度で動揺している自分にこそ戸惑いを隠せないでいた。

麻帆良案内板の前に着いて、小路がMAPを見上げている。

隙だらけだ　　今なら奇襲をかければ勝てる。

この服で大丈夫か？　否、問題ない、やれる。

今なら人通りは少ないし、間合いも十分だったから、後頭部めがけて一撃で取れるはず。

卑怯者の算段、そんなものが勝利？　ありえないことだ。

クーフエイにとって、戦いとは正面からの真剣勝負であることが前提だ。

そんな勝ち方で勝って嬉しいか？　答えはノーだ。

私は小路に負けた。

勝者が敗者を自由にする、という同条件で正面から負けたのだ。

愚劣で卑怯な勝利など勝利ではない、勝ったことにはならない。

だから受け入れたのではないか。

こんな格好は望んでいなかったけど、不思議と今は嫌ではなかった。

ここに来るまでの車中、ほんのわずか窓ガラスに映っただけでも、クーフエイはそこに映った自らの姿に何度見惚れたことか。

少し高潮した顔、揺れるリボンを見るたびに心が弾んだ。

女の子とはこんなにも

そのとき、小路が振り向いて、クーフエイの腕から力が抜けていた。

「クー、何か希望あるか？　映画館なんて柄じゃねえか、アミューズメントパークは？　まあ大したもんじゃないけどなあ。飯も食えればいいけどな」

「ど、どど、どこでもいいアル！」

「フーン。お、これなんてどうよ？ 結構広いよなこ」
「植物園？」

小路が指差したのは後ろの看板、麻帆良植物園の名が記されている。

派手さはないが広大な敷地には多くの植物が集められていて、麻帆良のデートコースの一つとなっていた。

「お。カフェテラスもあるみたいだな。昼飯はここで食おうぜ」

お食事どころありのマークを指差す小路。

その言葉にクーフェイのお腹がキューツと鳴った。

「わ、わかったアルよ！」

その音を隠すように両手を振って了解の合図を送るクーフェイ。

今の音聞かれなかったアル？

普段は気にしないような些細な心境の変化、それゆえか不意打ちの一言でさえ心を揺るがせるには十分だった。

「それに二人きりでゆっくりできるしな」

「へ？」

「嫌か？ 二人きり」

小路が後れ毛を揺らして二人だけの距離で囁くように告げた。

その瞳に吸い込まれるような気がして、クーフェイの心臓は高鳴り早鐘を打った。

ここで引くのは即ち 負けを認めること。

「く、の、望むところアル、その勝負受けて立つアル！」

「じゃあ、行こうぜ。近いから歩くぜ」

再び小路から差し伸ばされた手をじっと見つめるクーフェイ。頬に熱が集中するのが自分でもわかる。

「どした？」

「フン、こ、恋町。腕を組むアルよ！ デートとはそういうものらしいアル」

「いいぜ、ほれ」

肘を突き出す小路。

恐る恐るの気持ちであったが、クーフェイは小路の腕に自らの腕を通していた。

そして二人は堂々と恋人の如く歩き出す。

はたから見ると初々しいカップルなのだが、てんぱったクーフェイには自分達が周囲からどう見えるのか、それさえも失念させていた。

見ているこっちが恥ずかしいでござる。

後方一〇数メートル。

人ごみを盾にしながら長身の二人が小路とクーフェイの後をつける。

その二人も何故か一緒に腕を組んでいた。

「……クーフェイが攻勢に出たでござる」

「ああ、積極的だな。これは脈ありか」

「み、脈……。真名、クーが恋町に惚れたと？」

楓が隣の真名に焦り顔で問いかける。

女同士というシチュエーションに顔が少し赤い。
照れ性な楓である。

「男女の仲がわからないように女同士もわからないさ。昨日の敵が今日の友にだってなる。楓も覚えはないかい？」

「勝負に負けて相手を認める、というのはあるでござるな。では恋ではない？」

「クーが自分の気持ちをどう受け止めて消化するかによるな。恋ならいつかは冷めるし、気持ちに愛情が加われればそれは思慕にも変わる。女心は変わりやすいからな」

「く、真名はやっぱり恋したことがあるでござるな……」

経験の差を感じ取り、そっちの方面では乾杯を認める楓だった。
その真名は涼しい顔だ。

「楓もデートするといひ」

「誰と？」

「そうだな……。今、私としてるじゃないか」

「え！？」

にっこり真名が笑ってみせる。

それに対して楓はわざとらしく、がっくり肩を落とした。

「ストーキングしながらデートとは雰囲気ぶち壊しでござる……」

「それと何やら、お客さんが増えたみたいだ。私達よりよほどあの二人に関心がありそうだぞ？」

そう言って、真名は別の方向を目で促して見せた。

「ふむ、これはまったく役に立たぬし。出番もなさそうでござる」

楓は頷いて通信機のマイクとヘッドホンを下ろす。

先程からスイッチは切っていた。

なにせ雑音が酷く、まともに起動しているとは言いがたく、尾行する対象がかなり近いので通信機での傍受と指示を諦めていた。

「急いだせいでまともに機能しなかったな。済まんな楓」

「いい、大体こういうのは私の性分ではないでござる」

「植物園に行くみたいだな。たまには森林浴でもするか」

「森はよく籠るからありがたみが薄いでござるなあ」

「普通の中学生は森には籠らん。やはりデートでもして普通の女の子やってみたらどうだ」

「ナイナイ」

「駄目か？」

手を振って否定する楓に真名は意地悪に笑った。

数分前

先に行く二人と後をつける二人、さらにその後を追うように一組の少女達がいた。

セントラル中央で降りてきよるきよる辺りを見回す少女。

路面電車から降りた途端に膝に手をつけてげっそりする少女。

綾瀬夕映と長谷川千雨の二人だった。

「あー、やーせー？」

「どうしてついてきたんです、長谷川さん？」

夕映のその声に千雨の額に怒マーク。

「おい、お前な……」

眼鏡を光らせて負のオーラを発する千雨。

お前が釣ったんじゃないかバカーツ!!!

思わず小一時間ほど説教してやりたいが、空腹でそんなことをすれば、やめてーチウたんのHPはゼロよー状態になってしまう。

自分で自分の首を絞めることになるので、浪費を避けるために千雨は沈黙することにした。

「なあ……」

「はい？」

歩き出す夕映、その後ろに続く千雨、目指すのは案内板。

そんなものを見ても二人の行き先がわかるはずもない。

「もう諦めようぜ。一個前のバスなんだし、今頃だな……」

そのとき奇跡的に千雨は立ち去る二人の背中を見つけてしまったが口をつぐんだ。

何をトロトロしているのか、さっさといつちまえと内心毒づく千雨。

そう、今見たものは黙ってしまおうじゃないか。

そして綾瀬には諦めてもらい、頂くものを頂くのである。

腹の虫は鳴りっ放し、すでに他人と関わらないはずのスタンスはボロボロ、この上はサンドイッチだけでもせしめて朽ちた腹を満たすのみだ。

「いえ、これを試しましょう」

「あん？」

綾瀬が取り出したのはダウジングロッドである。
馬鹿な、それって地面の中探るインチキ道具じゃね？
と、うる覚えの知識でそれを見る千雨だった。

「小路、小路、小路……」

呪文のように夕映が呟くとダウジングロッドが揺れた。
マジなのか……。

歩き始める綾瀬、どういうわけか、奴のロッドが揺れる先はあの
二人が消えた方角である。

「くそ、科学が科学の力なんだよな……」

諦めたように弱々しく独白し、千雨はもう最後まで付き合っこと
にして、夕映の後を追って歩き始める。

ここまで来て帰ったのでは本当にただの徒労に終わってしまう。
元は必ず取り返すのが千雨のポリシーだった。

麻帆良植物園

植物園はそれぞれの区画で、季節に応じた草木花々が緑豊かに繁
茂していた。

ドーム上の骨格にガラスをはめ込んだ天井、園内は広く、案内の
パンフレットがなければ確実に迷いそうな構造になっていた。

園内に入るとこれ見よがしなカップル達が手を繋いだり、恋人し
ていたり、まさに恋の花を咲かせているのだった。

「腹、減ったなあ……」

パンフレットを見ながらお食事どころのページを開き、店のお勧めメニューに見入る小路。

そこはやはりまだ色気より食い気が勝ってクーフエが覗き込む。

「日本食、中華、カフェ、いろいろアルね。小路は何が好きね」

「食えりやなんでもいい」

「質より量アルか？ でも食べるなら美味しい方がイイね」

「美味しいねえ……」

小路はパンフレットを折り畳む。

向こうにいた頃は食えりやなんでも喰ってたっけな。

ネズミだろうがゴキブリだろうが、人肉だろうが、極端に生産能力が低下した未来世界の土壌は、九割近くが毒を吐き出す大地だった。

汚染されていない土地を探す方が大変で、食料の生産は土壌を生産プラントに移した施設で行われていた。

味覚遮断手術や感情凍結によってその意思を切り離して、自らをコントロールしなければ生きていけなかった世界。

まともな感性は死に絶え、死体など平気で漁るのである。

自給自足で生きることは難しく、誰かから奪うか、生産プラントを手に入れるしかなかった。

食べるため、生きるための暴力は争いを引き起こし、戦争終結後も世界で紛争が絶えることはなかった。

むしろそれが常識となってしまった世界で生きてきた小路にとって、改造されていない生身の肉体で普通の食事を味わえることはフアンタジーの部類だった。

つまり、何を食っても美味しいのである。

人工的な合成食材でない新鮮な野菜や肉を食らう事は小路にとっては道楽の域にまで達していた。

「超包子の肉まんが食べたいアルな……」

お腹を押さえてクーフェイが呟く。
同時にグーとお腹が鳴っていた。

「好きなのか？」

「モチアルよ！ 小路は食べたことないアルか？」

「ねーなあ……」

「それは人生を損しているアル、麻帆良に来て一番の楽しみは超包子の肉まんに出会えたことね！」

グーに拳を握り締めてクーが力説する。

超包子と超玲音

世界の破壊者。

いや、世界に殺された女だ。

この時代にお前は何を求めてやってきた？ 破壊と混乱？ 戦争と死を振りまくためか？

のほほん、と平和人している貴様は何なのだ。

魔法を世界にばらして同じことを繰り返すためか？

そうして貴様はまた夕映を殺すのか？

無意識に小路の拳に力が籠っていた。

「どうしたアル？ 小路？」

小路の顔をクーフエイが覗き込む。

「何でもねえよ。つーかあそこにあるの超包子の屋台じゃね？」

「え？」

小路が指差した先、木の陰に「超包子」と書かれた屋台車が停まっていた。

移動式の屋台で、超包子の宣伝カーも務めている。

学園内では超包子は知れ渡っているので、新規開拓にこのような場所まで出張しているのだろうと推測した。

「本当アルー。小路、行くアルよ！」

「へーい」

クーフエイが小路の手を握ってグイグイと引っ張って店の前に行くと、すでに人だかりができていた。

「まあ、空いてる方か……」

「フフン、運がいいねー。五月ー」

「あ、クーフエイさんに恋町さんじゃないですか」

二人を出迎えたのはふつくら少女の四葉五月である。

白い割烹着姿で口ボ子……。

絡繰茶々丸も同じ格好をして接客をしていた。

「おほ」

「五月、肉まんありったけ持つてくるアル！」

片手を上げ挨拶した小路に割り込んでクーフェイが注文する。
ありったけつてどんくらいだ？
食えるだけ食うってことか？

「はい、ごゆっくりどうぞ」

勧められるまま表屋台のテーブルに座って、最初の熱々肉まんが運ばれてくると、クーのやつは早速大口開けてがぶりと齧りつく。
すでに猫かぶりモードはかなぐり捨てていた。

「アチチ」

「慌てんな、モグモグ……」

続いて小路も齧り付き肉まんを味わって食べる。

美味い、とひたすら食いつくし、腹を満たすことに熱中する。

悪くねえな、千雨ちゃんだったらばっちり食いつきそつだぜ。

あの娘っ子はすぐわかりやすくイージーだ。

何といても壊しがいがあることこの上ない。

とはいってもまだ壊すつもりもないし、今のままの関係もそれなりに気に入っている。
子ども先生がやってくるまでの暇つぶしには丁度いいだろう。

一個目を平らげ、行儀悪く指を舐める小路。

早くも三個目の肉まんに取り掛かるクーフェイ。

そのとき、背後で爆発音が派手に響いて、ここまで届いた振動が屋台と二人が座る席を揺らしていた。

「何だあ？」

振り返ればそこには……。

あるところか、森のように茂る木々の向こうの小高い場所に巨大な怪物が現れていた。

一斉に人々が立ち上がって騒ぎ出す。

何だ、イベントか？

「面白そうアル！」

立ち上がったクーフェイが両手肉まんを抱えたまま目を輝かせる。

「小路、行ってみよう」

「お姫様の行くところなら地獄でも付き合ってやるって」

「ゴー、アル」

「あ、クーフェイさん!？」

呼びかける五月にお勘定はつけアル、と告げて背を向けるクーフェイに、五月はまたのご来店をお待ちしております、と丁寧な頭を下げた。

その対応振りは堂々と、何があっても不動の貫禄である。

ハハー、プロって奴か？

やっぱりあなたは大物だよ、四葉伍長殿！

未来でも食べ物のおっかさんなんだよねえ。

それはさて置いて、クーフェイの後を追いかけて小路も走り出す。その後を追って、さらに四つの影がバラバラに二人を追うのだった。

【8】麻帆良植物園の怪（前）

「ねえパルー」

分厚い本のページをめくった宮崎のどかが暢気な声で早乙女ハルナに話しかけていた。

その本人はのどかの目の前でノートを広げて落書き、もとい絵コンテの構想を一心不乱に書き込んでいる。

早いときは三日で一冊埋まってしまうネタ書きノートはすでに五〇冊近く溜まっていて、それらは寮の部屋に保管してある。

いわばハルナのマイお宝、というよりは実用的なアイテムとなっていた。

二人は植物園の見晴らしのいい展望台テラスでのんびりとテ・ブルにつき、午後の日向ぼっこを楽しんでいた。

少しばかり日差しは強かったが、雲がいい程度に日差しを遮ってくれるので、風を受ければ気持ちいいくらいだ。

午前中はのどかはハルナの買物に付き合い、息抜きがてらに植物園に寄っていたのだ。

様々な植物が繁茂する植物園は、本で得た知識を確認するのに役立つたので、のどかとしてはそれなりに有意義な休日となっていた。

「んあ？」

ハルナはわずかに眼鏡をかけた顔を傾げて返事をするが、空返事である。

手持ちのキャラに修正を加えているところだった。

動く手の速さによどみはない。

あっという間に書き直し、よし、というハルナの満足げな声が聞

こえる。

だかのどかは気にしない。

ハルナは集中しているといつもこうなのだ。

本を読みふけるときの自分もこんな感じになるからおあいこだった。

集中した時の傾向が似た者同士である、という共通点は、二人の関係を語るときそれなりに重要な事項となっていた。

「何かねえ、本にこんなのが挟まってたよ？」

「何それ？ どこにそんなのがあったの？」

のどかが持つのは古びた薄い紙の束だった。

表紙は黒く、表に書かれている文字はハルナの読解力では何と書いてあるのかすらわからない。

のどかが持っているのは図書館から借りてきた、ハルナにはよくわからない本だ。

それに挟まっていたというのだからそれも怪しい本に違いない。

のどかが読む本はそもそも書かれている文字が日本語でないことが多々ある。

いつものどかは本を入れるための背負いリュックサックを持ち歩き、その中にお気に入りの本を入れているのだが、今日は一冊だけ持って来ているだけだった。

そうしてどこでも本ばかり読んでるので、見かけと違って以外に体力がある。

「な、何語？」

「ラテン語」

「読めるのか……」

ずれた眼鏡を直してハルナはしげしげとその怪しげな紙束を眺め

る。

もう色々な意味で規格外な少女であるが、この程度で驚いていては麻帆良の生徒ではいられない。

近くで友人やってられるのは自分くらい、とハルナは自負していた。

「えっとねえ、『絵本落書き台帳』って書いてあるね
「ぶっ！」

思わずハルナは噴出し口元を拭う。

珈琲を飲んでいたら大惨事になるところだった。

落書きとか、昔の人のものだろうに。

「昔の人間の落書き本かあ。まさか漫画とかじゃないよねえ？」

興味津々といった風情のハルナがのどかの持つ黒い紙束を眺める。
どこからどう見ても薄い本だがコミケとは関係ない。

「えとー。んー、何も書いてないね」

「白紙？ それって何で？」

「私にはわからないよ」

のどかが黒い表紙をめくった後ヒラヒラ振ってみせる。

「ちょっと見せてみ」

「うん」

ハルナが受け取った落書き本は薄い。

黒い表紙をしげしげと眺める。

ラテン語らしく一文字たりとも理解できないが、『絵本落書き台

帳』らしい。

めくった中の古びた紙は滑らかで、昔のものとは思えない。

うーん偽者か。

だが偽者が白紙とか意味不明だ。

図書的な価値は薄そうだと判断する。

「これ、誰かがいたずらで入れたんじゃないの？」

「え？ うーんどうだろうね。この本とは無関係な気もするけど…」

…

しげしげとのどかは図書館から借りてきた分厚い本を見る。

そっちの本のタイトルも訊いた気はするが、ハルナの頭には残っていないかった。

「絵本の落書き帳俵ばせて入れてるなんて、昔の人もイラスト描いたりしたのかね。萌えーとか」

「萌えーって？」

首を傾げ、顔にハテナマークののどか。

風が吹いてのどかの髪が揺れ、素顔が垣間見える。

この天然女め！ とハルナは軽く心で吐き捨てた。

「これってさあ、所属不明図書扱いじゃね？ 図書カードにはないだろ？」

「ないみたいだね」

「じゃ、うちらで中身埋めても問題なくね？」

ハルナの提案に、えー？ と声を上げるのどかだが、いいのかなあ？ と分厚い本を抱えている。

いいんじゃない？ とハルナはにっこり笑う。

「よし、決まりー。昔の人が落書きできなかつた無念を私が晴らす！」

「あ、パル……」

のどかが制止するが、すでにハルナは止められない。

黒い表紙が開かれ、何百年かぶりの空気を空白の紙面に受けて、ハルナの肉筆のペンを受け止めていた。

植物園の木や花から着想を得たのだろうか、ハルナは樹木の妖精トレントに似た絵姿を描き込んで行く。

書き込む速さは神速の域に達し、中学生でこのレベルにあるハルナは漫画コンクールでは賞を受賞するほどだ。

だが違う、雰囲気がいっつもハルナではなかった。

その様子にどう声をかけたものか迷い、のどかはおろおろとしてしまっていた。

ペンを走らせながら、ハルナはぞくぞくとするような狂喜の悦びをペン先から感じ取っていた。

ああ、わかる、わかるよ。

こいつは待っていた！ 私という存在を。

この早乙女ハルナが形にしてやるのだ。

これがあるべき姿に

「パ、パル……？」

突然のハルナの変容にのどかは戦々恐々と見守っていた。

どこがおかしい。

まるでとりつかれたような顔をしている。

凄まじい速さの筆が止まると同時に絵は完成していた。

黒い本が紫色の光を帯びて、魔力が完成した絵に集中する。

漏れ出た光は本を伝い足元を照らし出す。

そしてそれは影のようにハルナの背から飛び出して頭上に現れていた。

空に浮かぶのは木の怪物を思わせるデザインの何かであった。

「ト、トレント?」

のどかはそのイメージを口にする。

その姿は世界樹のミニチュア版のように見えなくもないが、テラス全体を多い尽くすほどだった。

でかい、あまりにもでかい。

渦巻くような何かが、悪いものがハルナとりついている、とのどかは感じていた。

ただごとではない何かが目の前で、親友のハルナに起こったのだ。

「パル! その本を捨てて」

だかのどかの呼びかけにハルナが応じる様子はない。

黒い本から漏れ出た魔力のオーラに包まれて、ハルナはフラフラとのどかに顔を向ける。

怖気がのどかの背に走る。

紫の光に包まれ、赤く光る目は正気とは思えなかった。

その口の端が邪悪に歪んだ。

「お願い!」

足を踏み出したのどかを空中に突き出した木の枝が阻んだ。

ハルナを中心に風が吹き荒れて、どこからともなく現れた大量の緑の木の葉が舞い踊る。

のどかは木の枝を振り払い、一歩、後一歩と歩みを進める。

足元で吹き荒れる風と木の葉の抵抗は徐々に強くなっていく。
あと一步！

腕を前に伸ばして、ハルナに届けとその肩に触れた瞬間、緑の葉が足元で渦巻いてその足をさらっていた。

「キヤアッ！」

次の瞬間には、轟っ！と吹き荒れた暴風がのどかの身体を宙に吹き飛ばしていた。

空に舞う自分の身体。

突き出し伸びた木の枝の群れがのどかを突いて、遥か下の広場に叩き落とされていた。

「キヤアアアアアア」

駄目落ちるっ！

転落防止の柵があるものの、突風と木の枝に突き落とされ、のどかは落下していった。

眼下には植物園の青々とした緑が広がり、この高さから落ちれば死が待っていることは明白だった。

ぎゅっつと目を閉じて、のどかはやってくるであろう衝撃を待った。

のどかの身体に重い衝撃が走り、肉体が浮遊する感覚に見舞われる。

あれ？ 意外とあっさり？ 私もう死んじゃった？

薄っすら開けた目で高速で過ぎ去る地面が見える。

地面に激突したはずだったが、手前数メートルで何者かにのどか

の身体はさらわれていたのだ。

その風が唸る声を耳元で聞いていた。

そしてよく知った声が響いてのどかは顔を上げていた。

「よお、子猫ちゃん」

「こ、恋町さん!？」

「お口閉じてな」

滞空している時間は短かった。

落下するのどかを受け止めた小路が着地し、急ブレーキを足でかけ、激しい衝撃と土煙が二人を襲う。

土煙を立てた中から二人が姿を現す。

歯を食いしばり、目を瞑ったのどかがようやく身体の緊張を解く。土埃で汚れ埃っぽいが今はそれを気にしている余裕はない。

「な、何でここに!？」

「あん？ お姫様がピンチの時には王子様が駆けつけるもんだろ？」

子猫ちゃん、いい匂いするなあ」

「あん、ヒヤウツ」

小路が抱きかかえたのどかの髪の毛の匂いを鼻先でかいだ。

その顔の近さに思わず顔を赤らめるのどかだった。

近い、近すぎます。

のどかの額に小路の手が当てられておでこを晒していた。

「へえ、髪上げると可愛いじゃん。ずっとそうしてるよ」

「え?？」

「のどかは可愛いからな」

次の瞬間、小路の頭を手刀が襲った。

「何してるアルかああ」

「いてえ」

「宮崎、無事でよかったアルよ」

のどかを抱えて無抵抗な小路を手刀でまた叩くクーフェイ。そのクーフェイの格好に目を丸くするのどか。いつもとだいぶ違う印象に最初誰かと思ってしまったのだ。

「クーフェイさん？」

「そうアル」

また小路の頭を突つくクーフェイ。いい加減少ししつこかった。

「いてえなあ……」

「小路、あまりのどかにベタバタするなアル。緊急事態ね」

クーフェイが展望台上の樹木の怪物を指差した。

テラスにいた人々がこぞつて階段を駆け下りてくる姿が見える。周囲の人々も何だあれは？ と展望台を指差している。

そつだ、あそこにパルがいるんだ！

「パルがハルナがあそこにいるんです。あの怪物に捕まって。ううん、とりつかれてるみたいで」

「早乙女がか？」

「何かわからないが面白いことになってきたアル」

クーフェイがにんまり笑う。
面白くないよ！ とのどかは内心抗議する。

「クーフェイ！」「小路！」

「何だよ、ギャラリーが増えてきたな」

小路が声かした方に顔を向けると楓に真名、そして何故か千雨に夕映が走ってくるのが見えた。

抱きかかえていたのどかを下ろし、どうしたものかと腕を組む。
早乙女があそこにいる。

衆目監視の中で魔法バレか、さぞや学園関係者は頭が痛いことだろう。

だがあれを鎮めれば学園長に恩を売れそうだと小路は判断していた。

使えそうな奴は、っと。

「小路、何の騒ぎですか！」

血相を変えた夕映が小路に詰め寄ってくる。

その後ろでは千雨ちゃんが死にそうな顔で肩で息を切らしていた。
あーあ、お前ら何でこんなところにいるんだよ？

「まあ落ち着けよユエキチ」

妙な取り合わせだなあ、と小路は二人を眺めながら、勢い込む小柄な夕映を両手で引き離す。

抗議するような夕映の視線が見上げる。

その手はロリーなおっさんになら通じるだろうが、生憎見慣れた顔なんでスルーしていた。

今はそれどころじゃねえ。

「恋町、何が起きている？」

その横から冷静な声で真名が問いかける。

「あの怪物を止めるぞ。忍者っ子とクーは協力しな。真名もな。あそこに早乙女が捕まってるらしい」

「早乙女が？」

表情を固くした真名が楓と顔を見合わせて頷いた。

「つーわけで、夕映と千雨ちゃんは下がってな。あぶねーから」

「おい、恋町。あれは何だよ！ 特撮か、特撮なんだな。映画の口ケか何かなんだろ！？」

お腹を押さえた千雨ちゃんが展望台の樹木の怪物を指差す。

腹痛いの？

「そうそう、そんで早乙女が捕まってるってシチュエーションよ。正義の味方が助けんのよ」

小路は手を振ってお茶らけて答える。

「納得するかボケー。何で早乙女なんだよ！」

「そうです小路。何か危ないことするつもりですね!？」

ああ、うぜえ。

が、のんびりしてる間に展望台の樹木の怪物が吼えた。

振動波が植物園を多い尽くしていく。

結界の波動か、と瞬時に小路は理解していた。

同時に巨大な根が地面から突き出し、周囲の人間に襲い掛かっていた。

「チツ！ 避ける」

千雨ちゃんと夕映を繁みに突き飛ばし、小路は咄嗟に跳び上がって襲ってきた太い木の根を蹴り飛ばす。

軌道を外された根は伸びて、地上一〇数メートルまで上昇すると、地にいる楓達に向かってその巨根を振り下ろしていた。

「散開！」

真名が叫び、楓とクーフェイが飛び退る。

派手な音と土煙を立てて巨大な木の根が大地を震わせていた。

「はっ！ 派手に始めてくれたじゃねえか」

小路が叫び、展望台に向かって走り出す。

それを追ってクーフェイ、楓、真名が続く。

「恋町、どうするつもりでござるか？」

「本体を叩くだけさ。あたしは奴の注意を引きつける」

「危険アルよ」

「クーは一般人を避難させな」

「わかたアル」

「私が奴の足止めをする。楓、恋町が動きやすいように枝を攻撃しろ」

「了解でござる真名」

クーフエイが広場の方に走り出す。

それを巨大な木の枝が襲うが華麗に回避して駆け抜けていく。

「あたしら三人で奴を止める。基本は真名の作戦でいい。ござるは早乙女がいるのを忘れんな」

「うむ、任せろ」

「恋町も無理はするな。応援は来る」

学園関係者である魔法先生か魔法生徒が駆けつける前に終わらせてやる。

真名の言葉に笑って見せると、小路は展望台の階段を一気に駆け上がった。

【8】麻帆良植物園の怪（前）（後書き）

結構この話は時間かかってるなあ

【9】麻帆良植物園の怪（後）

中段になった広い踊り場にはまだ逃げ遅れた人々が残っていた。人々が目指すのは階下だが、襲い掛かる木の根に逃げ惑い、ある者は腰を抜かしたように動けなくなる姿があった。

その中で一人、その流れに逆らって青年が階段を駆け上っていく姿に小路は舌打ちをしていた。

次々と触手のような植物の根が地面から伸びて、逃げる人々をさらおうとするのを、巨大な十字手裏剣が根を断ち切っていく。

それを繰り返すのは忍者娘の楓である。

「おい、そっちは危険でござるっ！！！」

楓の制止を受けても青年は歩みを止めない。

その先に一人の少女がうずくまっているのが見えて真名は目を細めた。

青年は少女の元にたどり着き、少女を引き寄せて抱くが、青年はそこで動けなくなっていた。

若い父親のように見えた。

うずくまっただま顔も上げようとしない。

「恋町、ここは任せろ」

真剣な面持ちの真名が拳銃を構える。

それを見るときもなしに小路はその対処を真名に投げかけていた。

「任せた」

そう言って走り出すと、木の根をかわし、時にはそらしながら小

路は石段を駆け上がる。

どうやら動く対象に無作為に襲い掛かる性質があるようだった。とするならあの父親は無意識の内にそれを悟って動けないでいるのだろうか、などと詮無きことを思考していた。

あの怪物は植物園の植物と樹木を操っているのだ。

ここを上げれば展望台。

そこには操るものなどない。

あれを止めればこの騒動も終りだ。

であるから、小路は最優先事項から手をつける。

すでに親子の救出はあの二人に任せたのだから。

後方から放たれた弾丸が青年と少女を襲った木の根を打ち砕く。

十字手裏剣が飛んでその根を完全に切り離していた。

切り離された根はミミズのように蠢いてやがて動きを止めるとただの木の根に戻る。

それを飛び越え、走り抜け様に小路は少女を見た。

青年の方にすがりついた少女は泣いてはいなかった。

「強いじゃん」

ニヤリ、と口元で笑って見せると、小路は最後の段を一気に駆け上がった。

研ぎ澄まされた感覚が襲撃を予測して小路の白い髪が踊り、ヒュ

ウツ、と息を吐き出し、襲い掛かる木の枝を空中で蹴って打ち払う。

早いっ！ それにパワーもある。

手ではおそらくこの攻撃は捌き切れないことを本能で悟っていた。

蹴ってそらすのは隙が大きくなりすぎる。

正面で戦うことの不利を一瞬で理解する。

だが連打するように、小路の動きを阻害する木の枝が繰り出され、葉刃の塊が四方八方から襲い掛かった。

吹き荒れる嵐のような攻撃、枝と葉のコンビネーション技にステップを踏んで後退した小路が階段のへりでたたらを踏んだ。

「あぶねっ」

かわしたように見えたものの、腕に脚に高質化した葉が突き刺さっていた。

それを小路は無下に掴んで引き抜くと、鮮やかな肉の裂け目が見えて、そこから血が吹き出した。

見る見るうちに晴れ着が赤く染まっていく。

ヤベ、千雨さんに怒られちまう

「魔法生物ってやつか。魔力の補給源は早乙女か？」

指についた血をぺろりと舐めて、目の前一〇数メートル先の早乙女を小路は観察する。

紫色の魔力光を帯びていて、その頭上に浮かび上がるのは木の怪物だ。

どういうわけかある一定の距離からは攻撃してこないようだ。操れる植物や木はこの展望台には存在しないにも関わらずだ。

「動けないのか？」

猫脚立ちの構えを取って小路は一步踏み込んだ。

吹き荒れるような葉の刃が襲い掛かるが、今度は間合いぎりぎり、階段に飛び込んでいた。

頭の上を葉刃が吹き荒れていった。

階段にへばりついたまま、小路は眼下の二人と顔を合わせる。すでに親子は退避させたのか姿は見えない。

いいね、マナ、ミッションコンプリートだ。

真名が弾薬を再装填して構える。

「恋町、手こずりそうか？」

「問題ねえが、一人じゃ面倒だな。展望台の上じゃなきゃ奴は攻撃してこない。多分早乙女が動けないからだろうな」

「早乙女は怪我でもしているでござるか？」

「怪我はしてるようには見えないな」

「恋町、見当がついているのか？」

観察するような視線で真名が問いかける。

ここで腹の探り合いをする気はないぜ、マナ？

小路は口に混じった血を吐き捨てて、展望台の早乙女を眺める。

単純な話さ

「ありや多分、魔力が切れてるな。ほつときゃ魔力が枯渇して木も枯れるさ。宿主の魔力のキャパがなさ過ぎてあそこで動けないままガス欠してるのさ」

「魔力……」

楓が呟き、あたしじゃなくて真名を見た。

あたしって信用ねえのな。

まあ、どうでもいいけど。

「なるほどな。では魔力切れを待てばいいのではないか？ 放って

おけば枯れるんだろう」

どこか愉しみを帯びた口調で真名が告げる。

お前、わかってて言ってるのか？

ああ、わかってて言ってるんだな、と小路は理解した。

この小悪魔め。

本性はマジ悪魔だけだな。

「早乙女の魔力を使い果たして、動力源はポシャン、で、魔力を吸い尽くされた人間は死ぬな」

「な……」

楓が顔色を変えているめき立つ。

それほど仲が良いようには見えなかったが、クラスメイトにはそれなりに情があるようだ。

「ではどうする？」

冷徹で理知的な真名の声が問いかける。

答えは一つしかない。

「早乙女とあの本を切り離すしかない。時間は、あまりねえかな？」

ハルナと本。

供給される魔力が減少しているのか、紫光は目に見えて大分薄くなってきた。

「ならば、やるでございませぬ。真名、恋町。手を貸して欲しい」

一步前に楓が踏み出すと、真名、そして次に小路を見た。
一人熱血してやがる…真名に小路が顔を向けると、真名は頷いて笑ったように思えた。

「問題ない。まだいけるだろ？ 恋町」

真名の試すような視線に。

「仕方ねえな。まあ腹八部目ってとこだしな。全部いたたくとしようか。元々その予定だったしな」

首を曲げて小路は不適に笑う。

そして早乙女目掛けて三人で同時に走り出していた。

作戦は簡単、早乙女の魔力が尽きる前に本を切り離す、それだけだ。

簡単なようでは無理な作戦。

狙撃は真名が、誘導は小路が、怪物の攻撃は楓が引き受けて、即席のチームで怪物の初弾の攻撃を凌ぎきっていた。

その間生まれる時間は刹那の瞬き

その隙を突いて小路が早乙女の懐に飛び込むと、本を持つ腕を捻り上げていた。

操られているとはいえ、その身体能力は普通の中学生と変わらない。

掴まれて宙に差し出される手、間髪をつかさず真名から銃弾が放たれ、黒い本にそれは命中すると、紫色の魔力の残滓をまもってそれは分離していた。

それと同時に力を失って倒れる早乙女の身体を小路は抱え上げて

いた。

怪我は一つもしていない。

轟っ！と風が吹き荒れて、空中に現れた木の怪物の姿があやふやになり、ブラックホールに飲み込まれるように一筋の紫の霧となつて本の中に消えていく。

魔力の供給を失い、わずかに保っていた姿が存在を維持できなくなつて消失したのだ。

残された黒い本の頁が風でぱらぱらと捲れて閉じられる。

そこからはすでに悪しき魔力は消え去っていた。

それを拾い上げたのは真名だった。

黒い本には銃弾の痕があるものの中身はまったくの無傷だった。ハルナが描いた絵も消えている。

「お姫様の救出に成功つてとこだな」

「そのようだ。応援も来たようだしな」

真名の言葉に眼下を見下ろすと、麻帆良関係の魔法先生と魔法生徒らしき姿がちらほらと見えた。

「あー、真名。それがしはここでおさらばでござる」

「おい楓……」

片手を上げて済まなそうな顔をして、楓は真名の返事を聞かずに展望台から跳んで降りた。

さすがは忍者娘である。

「んじゃ、あたしは行くわ」

「おい恋町 いや、後は適当に報告しておく」

「頼むわ」

気絶したままのハルナを抱えて小路は階段を下りていく。
その背中を真名は見送ると、どう学園長に言い訳をしたものか、
と手元の黒い本を眺めてため息をついた。

長谷川千雨、終結前

休日コンビニで過ごすはずだった私はどういっわけか植物園に
いた。

そしておかしなことに巻き込まれた。

すべての原因は綾瀬夕映と恋町小路の二人にある。

そして騒動を持ち込んだのはこの女、宮崎のどかである。

この間といい今日といい、お前アグレッシブ過ぎるだろ！！

小一時間説教してやりたいところだが、そんな余計なエネルギー

使うのもばからしい。

帰らせてえ。

「長谷川、危ないアル」

クーフェイに襟を引っ張られ転ぶ千雨、その頭上を植物の蔭が飛
び去って宮崎と綾瀬を絡み取っていた。

「キヤーツ！！」「ふあっ！」

何だ何なんだ？

これは何かのアトラクションで、いつの間にかステージにでも上
がっていたのか？

宙ぶらりんになった二人の鳶を解きながら、私はそのありえないものを見ていた。

展望台の上のどこかコミカルな木の怪物。

宮崎によると早乙女が捕まっているらしい。

ほら、やっぱりコレはアトラクションで、あたしらはそれに巻き込まれたんだよ、そうに違いない。

しかし目の前に広がるのは到底イベントで済ませるには散々たる有様だった。

地面には穴が開き、木の根っこが飛び出したり鳶が襲ってきたり、花がわけのわからない霧を吹いたり、と数え上げれば切りがない。

CG：これは視覚網膜に直接投影される映像なんだよ！
うんそうに違いない。

ちなみにそんな技術日本では確立されていない。

それに麻帆良の大学の滅茶苦茶な連中ならこれくらいの技術でアトラクション作るんじゃないの？

クソ、流されるな私！

非現実突きつけるんじゃないやねーっ！！

「ありがとうございます。長谷川さん」

「ちょっと苦しかったです……」

「とつとどこから逃げようぜ。クーフェイはどこに行ったよ？」

「あそこに」

宮崎が指差した先で植物に絡まれる男女をクーフェイが助けていた。

可愛い格好もすでにパンチラ見せようがお構いなしである。

あいつは放っておいて問題ないな、嬉々として遊んでるようだ。

二人に行こうと促そうとして途端にヘナヘナ、と力が抜けて私は

座り込んでいた。

「どうしました？」

「…え、いや」

どう答えたものか迷ったが、腹がグーっと派手な音を立てていた。空腹はとつくに限界を突破し、ひもじさに血まで頭に届かない始末だ。

ヤバイ、食べ物を何か食わないと、死ぬ。

大げさながらそんな心境である。

「これを食べるですっ！！」

夕映がサンドイッチを差し出して、千雨はそれをがつつくように齧り付いていた。

穴が開いた芝生の上でピクニック宜しく何故か三人でサンドイッチを食べている。

どこがおかしい光景。

避難とかもうどうでもよくなってきた。

ここら辺の騒動はもう収まっていて、怪物騒ぎは収束に向かって
いるようだ。

綾瀬も宮崎ものほほんとお茶を飲んでいる。

三つ目のサンドイッチを食べ終えた頃、展望台の化け物が姿を消
していた。

やっぱあれはCGだな！

宮崎が立ち上がって綾瀬が駆け出していた。

その先には早乙女を抱えた恋町がいた。

何で真っ赤に染まってるんだ？

衣装もぼろぼろである。

キーンッ！！ と綾瀬が悲鳴を上げて気絶する。

おろおろと宮崎がそれを支える。

早乙女を芝生に寝かせて小路が芝生を踏みしめて歩いてくる。

私はお構いなしにバケットの最後のサンドイッチを口の中に詰め込んでいた。

非現実の応酬にはやけ食いで対処するのみだ。

気配がすぐ側に座って、私は最後の一口を咀嚼してお茶で胃に流し込んだ。

「あのさ、千雨たん」

「何だよバカ町、押し売りセールはもう間に合ってるぜ」

千雨は明後日の方角を眺めて呟く。

風がビュウツと駆け抜けていく。

腹もくちて、ようやく私は私の現実を取り戻す。

「ごめんな、服、破れちゃった」

「弁償しろよ」

「ん、わかった」

そして隣で気配が動く。

「おい、バカ町……」

あろうことが奴は寝そべって、私の膝に頭を乗せた。
「つか全身傷だらけじゃねーかつ！！」

「おい……落とすぞ、こら」

「わりーちよつと疲れた、寝る……」

そして小路は小さく欠伸をすると、ギユウツと顔を千雨の膝に押し付ける。

途端に羞恥心を感じて千雨は周囲の視線が気になる。

通行人などほとんどいない。

みんな避難してしまったからだ。

「あー、千雨さんの匂いがする」

「おま、きもいぞっ！」

千雨が覗き込むと小路は寝息を立てて眠っていた。その寝顔はいつもと変わることがなかった。

【10】真名と刹那（前）

龍宮真名は裏の世界、いわゆる魔法世界では一流と呼ばれるスナイパーの一人である。

職業柄、あちらでも違法すれすれ、もしくは違法の一端を担うこともあるのだが、本人はそれすらも生き残るための糧として、金、という誰にでもわかりやすい代償を得ることで生計を立てていた。

その彼女が麻帆良学園で学生という生ぬるい環境に身を置くことになったのも、ある事件がきっかけとなっていた。

その事件で真名は最愛の人を失い、一時的だが追われる身となり、その潜伏先として、最愛の人の生地である麻帆良を選んだのである。龍宮はその彼の姓名であり、寄る辺なく愛息の死を伝えた真名を引き受け、尚且つ龍宮の名を与えたのは、彼女の絶望の深さを知った龍宮の家の人々の配慮であった。

かくして真名はマナ・アルカナから龍宮真名という人間に生まれ変わり、異国である日本で安寧の場所を得たのだ。

龍宮家に今は跡継ぎはなく、愛息の妻という扱いで龍宮家に身を寄せていたが、両親の計らいで、うるさい親戚連中には、表立っては龍宮の家に連なるいとこの龍宮真名という立場であった。

今は龍宮家の跡取り扱いであるが、いずれ折を見て縁戚から人を取り、龍宮の家を継がせるつもりだと両親からは告げられていた。あくまでも真名にはそういった家の負担を背負わせるつもりがないことを示したのである。

その立場に不満などなく、むしろ、それほどに気を使わせていることに心苦しさを禁じえなかった真名であった。

愛する人の墓標をこの地で守れるのならば、麻帆良に実を埋める

のも悪くはなかった。

ただ世界では未だに多くの戦いが満ちていて、マナ・アルカナとしての助力を嘆願されることもあった。

ネットワークにおける彼女が保持する伝手を伝えて依頼は時折舞い込んでくる。

それらの仕事の赴任先は紛争地帯であり、硝煙と死の匂いが漂う戦場でもあった。

その時に限り、真名はマナ・アルカナとしての戦装束に身を包み、スナイパーとしての技でもっていくつもの敵を屠った。

大概の任務は数日から一週間で終了し、仕事が終われば真名は麻帆良に舞い戻った。

彼女が麻帆良で魔法生徒として任務をこなすようになったのは、ひいては龍宮の両親の願いであったからだ。

危険な任務を帯びて戦場に立つ真名を、まだ若い身空でそのように死をまとう彼女の将来を案じた両親が、麻帆良学園の理事である学園長に相談したのである。

真名としてはどちらでもよかった。

自らの退屈を埋めるためにそのような仕事を引き受けていたものの、周囲からは死を望んでいるようにも受け取れたのだろう。

なまじ、当時の絶望を知る両親ならば尚更で、死に場所を求めていると思われたのだろう。

多少余計な配慮ではあったが、真名は両親の意見には全面的に従った。

麻帆良での仕事の大半は学園敷地内の巡回と警備が主で、侵入者を撃退し、一般人、もしくは魔法関係の施設を守ることにその時間は割かれていた。

仕事中は常に二人の魔法関係者でパートナーを組むことが義務付けられていた。

その真名のパートナーに選ばれたのは桜咲刹那である。

京都神鳴流の剣士であり、魔法ではない技を持って異形の存在と戦いつる接近戦のスペシャリストであった。

片や龍宮真名は狙撃も接近戦も問題なくこなす使い手であったから、分業しやすい分、今の組み合わせは理想に近いものがあつた。

異分子同士の組み合わせ

魔法先生、魔法生徒と呼ばれるからには、パートナーの片割れの一人は最低限でも魔法使いであるのが主流であつたから、この二人ほど目立つものはなかつた。

一流のスナイパーだが裏事情のある龍宮真名。

京都で培われた、日本に古くから存在する魔を討つ剣を扱う桜咲刹那。

関西の魔法圏に属する立場の刹那は、この麻帆良においては警戒される存在であつた。

麻帆良が属するのは関東魔法協会であり、この地こそが関東魔法協会の総本山であつた。

学園長である近衛の名を持つ老人は飄々とした人物だが、その実力たるや魔法世界でも屈指の達人の一人である。

今年から、関西から孫娘の近衛木乃香を麻帆良に迎えており、刹那はその護衛として迎え入れられたのであるが、内部の魔法関係者からの反発が強く、学園の警備に桜咲刹那が就くことを強く主張したのである。

わかりやすく監視の対象としての立場を強要され、刹那は護衛以外の仕事に従事させられる羽目になっていた。

これでは護衛の意味もなく、いたずらに関西を刺激した上に裏切り者のレッテルを刹那は貼られることになつたのだ。

互いに異分子としての立場でありながら、二人の立ち居地は大きく異なっていた。

しかし刹那も元が関東魔法協会とは関係のない真名に対しては幾分打ち解けなくもない部分もあったから、学園長が指示した配置はベターなものであった。

日々、警備という日常を通じて、たまに侵入してくるものを退け、息抜きを兼ねたクラスメイトとのやり取りや、木乃香に本心を打ち明けられない、鬱屈した相棒の刹那をからかうのもそれなりの楽しみとなっていた。

学園長室

「それでは先日の騒ぎは魔力の吹き溜まりの暴走の結果、というわけかね？」

「はい。推測ですが」

学園長室で真名と刹那に詰問するのは黒い肌に硬質な雰囲気をもったガンドルフィーニだった。

答えるのは真名、刹那はその横で沈黙を保っている。

先日の植物園における騒ぎの報告を真名がしている最中だった。

学園長はその問答には参加せずに、黙ったまま、そのやり取りを静かに聞いていた。

「魔法具が偶然あそこにあり、たまたま魔力の吹き溜まりに反応したなどありえん。あの魔法具には強い魔法がかかれていた。そもそも適正者以外を受け付けない代物なのだ。その場にいた所持者を何故拘束しなかったのかね？」

「私が到着した時、すでに発現させたと思わしき人物は確認できませんでした」

「ふむ…ではあれはトラップ。何者かによる陽動であつた可能性が
なくもないな」

握り拳を顎に当てて考え込むガンドルフィーニ。

「そもそもがアーティファクト級の魔法具。他所から持ち込まれた
形跡は確認は取れなかった。結界の監視にもそれらしき人物は確認
されていない。潜伏していたにせよ。こちらの網にかからない魔法
関係者か…厄介なことだ」

「普通の一般人である可能性はありますか？」

そう問いかける真名。

それにガンドルフィーニは即答していた。

「ありえん。まずあの本は限定魔法書だ。所持者を選ぶ魔本の類だ。
あれほどのものであればまず所有者は魔法関係者以外ありえん」

「近衛木乃香のような存在であれば？」

木乃香の名に刹那は伏しがちだった顔を上げて、幾分強い目つき
で己の相棒を睨んだ。

それを無視して、真名はガンドルフィーニに質問を投げかけたま
ま視線をそらさない。

「自覚のない人間による魔法具の発現ということか。理解はできる
が、どうやってあれを手にしたのか。図書館島の奥にでも眠ってそ
うな代物だ」

「自覚のない人間が持ち出し、自覚のない潜在能力者がそれを使っ
たと考えられませんか？」

「それは、いや…ありえない仮定ではないが、仮定で話をするわけ
にはいかん」

「私は現場での発現時の目撃者でもありません。もしテロ行為が目的であったなら、もっと効果的な場所で使うことでしょう」

「怪我人が出たのだぞ？ 重傷者はいなかったが」

「陽動が目的だったなら別で行動を起こしたはず、その時間に動きはありましたか？ ガンドルフィーニ先生」

真名の言葉に眉を上げるガンドルフィーニ。

姿勢を崩して彼は学園長に目を向けていた。

真名と学園長の両名を視界に入れて。

「騒ぎが発生した時間、怪しい動きは見られなかった。学園長、変わった動きはありましたか？」

「そうじゃのう……その時間は昼寝をしようとしたのう。大きな魔力の流れは感じ取ったが、すぐに消えてしもうた。龍宮君が言う、潜在能力を秘めた発現者の存在という線は否定し切れんの」

「しかしですね……」

「ともかくじゃ」

ガンドルフィーニを制して学園長が言葉を続けると、ガンドルフィーニは一步下がった。

机の上に黒い本が置かれる。

「この残留魔力を辿ったが持ち主の魔力パターンは極めて素に近い、魔法を学んだ者のパターンは感じ取れなんだ。魔法を扱えぬ魔力の持ち主である可能性もある。魔法世界にはそういう種族も存在するしの。そういった体質であるならば、無自覚ならば我等が保護する必要があると考える。ガンドルフィーニ先生は引き続き調査を行い背後関係を洗ってくれ。龍宮君と桜咲君は持ち主の特定と保護を念頭において欲しい」

言い置いて、学園長は再び本を手に取って机の中に閉まった。

「わかりました学園長。二人とも、本はこちらにあるから危険はないが、万が一もある。連絡を密にしろ」

「わかりました」「了解しました」

ガンドルフィーニの指示に二人は応え、三人は学園長室を後にしていた。

【10】真名と刹那（前）（後書き）

続きはまたあとで執筆。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4911v/>

未来からの転生者 オリ主は戦闘機人のようです

2012年1月14日08時47分発行